

比較文化研究に対する一つの 統計的分析の試み I*

—日本人の国民性とハワイ日系人—

鈴木 達 三

(1973年8月 受付)

A Statistical Approach to Cross-Cultural Study I*

—Japanese national character and Japanese-Americans in Hawaii—

Tatsuzo Suzuki

The English version will be published in the *Ann. Inst. Statist. math.*, later.
The Institute of Statistical Mathematics

目 次

| | |
|------------------------------|--|
| § 1 はじめに | 2 有意差のある項目数 |
| § 2 方法論的考察 | 3 基本項目との関連の型の比較 |
| 2.1 国民性の定義と研究調査との関連 | 4 年齢と学歴による意見の差の比較 |
| 2.2 比較文化的研究における問題 | 4.2 「日本との関連の強さ」と各人の「意見との関係 |
| 1 調査の同等性 | 1 全項目との関係 |
| 2 質問票の同等性 | 2 伝統的↔非伝統的意見との関係 |
| 3 比較可能性を高める方策 | 3 まとめ |
| § 3 単純集計を用いる比較 | § 5 各個人の日常生活の類似性とその人の“ものの考え方”の関連 |
| 3.1 調査の同等性の吟味 | 1 分析の手順 |
| 1 面接調査の同等性 | 2 各個人の属性と日常生活のパターンによる個人の類別 |
| 2 調査対象の同等性 | 3 各質問の回答カテゴリの分類 |
| 3.2 日本の調査とハワイ日系人調査の単純集計結果の比較 | 4 “各回答カテゴリに与えられた数値”と“日本およびハワイ両調査における比率の差”の関係 |
| 1 質問項目および回答選択肢の分類 | § 6 質問相互の結びつきについて |
| 2 「多数意見に基づく分類」を用いる比較 | ——質問項目相互の関連度(回答カテゴリの分類における内的一貫性)—— |
| 3 日本の調査資料の回帰分析の結果を用いるカテゴリの分類 | 付 録 基本項目別分析一覧表 |
| 4 「回帰分析に基づく回答カテゴリの分類」を用いる比較 | 文 献 |
| 3.3 両調査結果の差の相対的な大きさ | |
| § 4 クロス集計を用いる比較 | |
| 4.1 基本項目別分析 | |
| 1 分析の手順 | |

§1 はじめに

日本人のものの考え方を研究するためにはいろいろな方法がある。

われわれはこの問題を“世論調査形式”の質問文に対する回答パターンから考えることにし

* これは、林知己夫、西平重喜、鈴木達三、野元菊雄、青山博次郎の共同研究によるハワイ日系人調査 (T. Suzuki, C. Hayashi, S. Nisihira, H. Aoyama, K. Nomoto, Y. Kuroda and A. K. Kuroda, A Study of Japanese-Americans in Honolulu, Hawaii, *Ann. Inst. Statist. Math.*, Supplement 7, 1972) において、得られたデータの分析に基づくものである。分析にたずさわった大久保道子、高橋和子、林文の諸君に深く感謝するものである。

た。

すなわち、一般の日本人が日常どのような考えを持ち、どのようにして物事を処理していくか、あるいは、ある問題についていかに対処するか等のことを、一定の角度から調べる。一定の状況設定をして、それに対する意見、態度を調べる、あるいは、ある意見に対する賛否を問う、という形式をとるのである。

面接調査において、被調査者の回答が導き出される過程は個人の内部のことであるから表面的には分らないし、個人個人について種々の事情が考えられる。しかし、操作的な概念構成として、つぎのように考えることができる。

被調査者がある回答をした、あるいはいくつかの質問について、ある回答のパターンを示したとき、それは、その人にとっての“ものの考え方”を示す一つの指示量、指標として考える。

このような回答パターンが各人各様であるならば、人々の“ものの考え方”に共通な点は考えられないが、いくつかの共通パターンが認められる、あるいは個人個人をグループ分けしてみると、それぞれのグループにおける各人の回答パターンに特徴がみられる、あるいは、ある質問項目に対する回答はそれぞれのグループの間で相違がみられる、等のことがあれば、これを各グループを特徴づける差と考えるということである。

このように考えれば、われわれが一定の状況設定をして、質問文に作り上げ回答を求める質問項目は、単純にその回答分布を考えるばかりでなく、われわれの側からみれば、一定の方式で人々をグループ分けするのに利用できるし、また、回答パターンによりグループ分けしようという目的で、この質問項目を調査するということになる。一方、被調査者の側からみれば、その質問項目の回答選択肢に示されたものについて、自分の考え方から許容できる1つの選択をしたことになる。その選択が、その人の意見や態度として、内部だけに止まっているものかそれが行動まで一貫した選択をする可能性のあるものなのかどうかは必ずしも明らかでないが、これはわれわれの立場からすれば明らかにならなくともよいことである。

しかし、この場合、各個人は、調査票に盛り込まれた、それぞれの質問項目に対して回答し、その結果が回答パターンになるわけであるから、われわれが設定した質問項目の方に何らかの構造（パターン）があれば、それに応じた選択がなされる可能性が強いといえる*。

したがって、われわれの調査項目設定の基本的態度が大きな影響をもつことになる。そればかりではなく、われわれの研究調査がいわゆる「国民性」の研究と関連するかどうかもきまってくる（この問題は次章参照）。

ここで、われわれはどのようにして調査してきたかを簡単にのべておこう。

一定の標準化された質問文の組（セット）からなる調査票を用いて面接調査をおこない、

- ① 各質問の回答分布
- ② いくつかの質問を組にしたスケール
- ③ 性、年齢、学歴等の属性により各個人をグループ分けしたとき、各グループの間の回答分布の比較による相互関係
- ④ いくつかの質問に対する回答パターン、すなわち、質問の相互関係

これらを主な分析の柱としてとり上げ、その時間的な安定性および変化の状況および他国民、他民族あるいは他の文化に属する人達との比較をおこない、共通性および差異から日本人のものの考え方についての全体的な描写をすることを目指してきた。

もちろん、とり上げる分野には限りがあるので、始めは限られた範囲についてはあるが、明確な範囲の中で“人々のものの考え方”について、調査資料に基づき分析を試みることにした。

このため、1953年から5年ごとに全国からの代表サンプルとして層別多段抽出法により毎回3000~4000の確率サンプルをとり、それらについて面接調査をおこなってきた。

日本国内の調査およびその結果は[17],[18]に詳細な分析結果が発表されており、[13],[14]

* たとえば質問項目の構造等については L. Guttman の facet 理論などは参考にならう。

には主として上のべた①に関する概要が、時間的にみた安定性および変化の面から英文でのべてある。また比較文化的研究の試みとして、Hawaii の日系人について実施した調査の結果と、日本の日本人に対する調査結果との比較を、やはり①の点について [19] にのべておいた。

この報告では、これらの4回の国内調査の結果および、上のべた [19] Hawaii 調査の資料を用い、日本人のものの考え方および日系人のそれについて、二、三の分析を示すことにする。分析に入るまえに、方法論的な問題を二、三のべる。

1つはわれわれの研究手法といわゆる“国民性”の定義との関連の問題であり、いま1つは、比較文化的研究における方法論の問題である。

§2 方法論的考察

§2.1 国民性の定義と研究調査との関連

われわれはすでにのべたように、世論調査の結果、個人(20歳以上)の“ものの考え方”の反映として得られたデータから目に見えるものとしてとらえられた諸性質を基礎にして日本人のものの考え方について考察している。これがどのような意味で“国民性”と関連しているかという点を考えよう。

ところで、これまでの国民性の研究の歴史をふりかえってみると、各方面でいろいろの研究がなされてきた。すなわち、人類学では“文化とパースナリティ研究”の1つとして、心理学では“比較文化的”な視野に立つ“モータル・パースナリティ”の研究が1950年代から盛になってきた。また、社会学ではこの20年間 Inkeles (1953, 1959, 1963) および T. Parsons (1963) 等によりパースナリティと“社会構造”との関係が研究されてきた。このように多くの理論的研究にもかかわらず“国民性”をうまく定義しているものはほとんどないし、この分野の研究の見通しや限界もほとんど論議されていない。

しかし、どのように定義するにしても、“国民性”は、その社会における人々の共通な、あるいは標準的な性質に関係して考えられているようにみえる。(Inkeles and Levinson (1954, 1968)) われわれの考え方は一部分ではこの考え方と重複するだろうが、他の面では異なる。

さて、われわれは日本人のものの考え方を通して日本人の国民性を描写することを目的としているので、日本人の国民性についてこれまでのにべられたものを集めて(およそ3000項目)、それらを整理し、ブリテストをして、質問文にまとめ上げた*。くわしいことは文献 [17] にあるので要点のみをのべると、問題の設定に当っては、誰にでも身近かに具体的な状況として考えられる場面を設定し、その場面における判断を(可能ないくつかの場合についてその1つを選択させる質問項目もあるが多くは)二者択一の形式で選択させている。多くの場合、一方の選択肢には“伝統的な日本人のものの考え方”とみられるものをとり入れ、他方には、これに対応する新しい考え方(必ずしも新しいというわけではなく、ある項目では“伝統的ではない”考え方となる)をとり上げている。

質問項目にとり上げた内容も、いくつかのとくに日本的な事柄に焦点をあてた項目の他は、国際的にも比較が出来るように考えて、質問の設定状況を一般の形にしている**。とくに日本的な価値観として知られている“義理人情”に関係のある質問群も174頁にある質問文の例からみられるように質問文にはどこにも義理人情という言葉は入っていない。ただ、登場人物の人間関係あるいは回答選択肢の文脈(選択パターン)のうちにどれを選択すれば義理人情的になるかという意味で、この問題を考えるようになっている。すなわち、回答パターンとしての分析が可能なように配慮されているだけであり、一般の質問と同様国際的にも比較することが可能なように設定されている***。

われわれの調査方法は、また、質問文および回答選択肢に使用されている言葉の問題に大きく影響をうけると考えられる。

* [17], [18] 参照。

** 次節参照

*** 恐らく諸外国では身近かな人間関係の質問文として受けとられ、回答されるだろう。

ここで、言葉というのは、紙に書いてある文章というよりは、質問文と回答選択肢全体を1つの組として考えたものであり、面接調査という場を考えたい際の質問と回答との対応関係である。

このような場合、われわれが伝達しようとするもの、あるいは、回答者が伝達されるだろう(された)と考えているものは、質問文の文章として書かれた言葉のもつ辞書的な意味における直接的表現ばかりでなく、文章全体が示している比喩的表現、あるいは隠喩的表現が含まれている可能性がある。(われわれが意図しなくとも、その可能性がある。)

したがって、われわれが調査しようと意図したことと、実際に調査されたこととは、必ずしも一致しない。

これがわれわれにとって、不利になるというよりは、ある面からみると、分析上有利な点を提供してくれる。というのは、このような比喩的表現や隠喩的表現は、われわれの考え方のうちに存在する(暗黙の)共通部分と深く関連しており、密接に結びついているといわれている[3]。一般的に言って、文を理解するためには、このような文章表現の底にあるものを理解することが重要であり、これらの表現において重要なのは、言葉の辞書的な意味よりも、その言葉によって連想される常識の体系であるといわれている。

このように考えると、特定の質問文を用いて調査するということは、回答者すなわち、全体としてのわれわれ日本人のものの考え方について、たんに、ある質問に対する回答が“賛成”であるか“反対”であるかということだけでなく、その質問文に盛られたタトエ話が、共通の話題として全体に通用するかしらないか、あるいは、通用する範囲はどの範囲かということ調査結果から分析することが可能であるということになる。すなわち、われわれが暗黙のうちに共有している“ものの考え方”はどのようなものか、共有している範囲はどうかということ考察することが可能になる。

このことは、われわれの目的としていることが、個人個人の質問項目に対する“賛成”、“反対”という回答の比率ばかりでなく、その底にある、全体として共通にある“ものの考え方”のスジ道を明らかにするという、いわば日本人のものの考え方を描写するというに直接関連していることになる。

しかし、このためには、各質問文がどのような文脈で理解されているか(どのようなタトエ話として受け取られているか)ということがわからなければ、結局何にもならない。

これには後にのべるように、被調査者を一定の観点からグループ分けして、各グループにおける回答分布を比較分析する、あるいは、各質問項目を、やはり、一定の観点から分類して、それぞれの組合せにおける質問項目相互の関連の模様をみる、等の関連分析的な考え方および、回答のパターン分析の手法が、有効に利用される。

以上のことから考えをまとめると、われわれは調査により得られた

①回答結果のうち、多数から支持された回答を、多数意見として考え、これは、われわれの社会を特徴づける可能性が強いと考える。

(これは、Inkeles等のモータル・パーソナリティ構造の一部としての可能性も考えることが出来るだろう)

②各個人の属性と関連づけた社会階層的なカテゴリ内における回答の分布、および、カテゴリ間における回答分布(の差)の比較、たとえば、ある意見は、高年齢層よりも年齢の若い層の方が支持する率が高いとか、あるいは逆に低いとかにより、この意見の相対的な位置を知る。[このことは、次節にのべるように、比較文化的研究分析のとき有用である。]

③回答(選択肢)相互の関係(連)、スケールの構成、

あるA意見に賛成であれば、他のB意見にも賛成である等の質問相互の関係の強さにより、質問相互の類別を考えると共に、被調査者を社会階層別に分類し、それぞれの階層についてみた質問相互の関連の度合いから共通の理解が得られる範囲はどの部分であるか等の分析をおこなうことが出来る。さらに、いくつかの質問を組にし、回答選択肢の共通性を考慮して、一定の方式でスケールを構成する。これらのスケール値を用いて分析する。

- ④特定の質問の組における各個人の回答パターンの類似性から、各質問相互の類似性を考えるパターン分類の手法により、質問の相互関係の配置がどのようになっているかを考察する。

恐らく、質問の組合せに特定の構造が考えられ、それが実在するならば、すなわち、それが回答者の回答に反映しているとすれば、以上の分析により全体的な構造が浮きぼりになるだろう。そして、この構造自体は、多少の表面的な社会的変化に対しては、安定したものであり、その社会に固有の“核”として残るような表面に表われないものであって、回答結果の表面的な比率や相互関係だけからは、必ずしもはっきりとは示されない固有のものであるだろう。これらは国民性を考えるとき、重要なものとなるだろう。

以上のような考え方に立つのが、われわれの操作的な分析の過程である。

§ 2.2 比較文化的研究における問題

すでに [17], [18], [15] でのべてあるように、われわれの研究は、頭初から“日本人のものの考え方”を他の諸国民、諸民族の“ものの考え方”と比較して考えるという、比較研究を旨としている。

1. 調査の同等性

比較研究において考えなければならない点は、比較可能性のある調査を実施するという問題である。

測定手段としての面接調査には、大別して、調査員、被調査者（サンプル）、質問票および集計・分析の4つの側面があるので、これに沿ってこの問題を考えよう。

その第1は、面接調査の状況を標準化する場合の問題についてである。まず、大まかにいって、われわれの採用した標準化された測定方法（標準化された質問票、一定形式の面接調査の方式等）が、われわれ自身の住む社会（日本）に特有の社会的背景の影響をうけるということが考えられる。

たとえば、面接調査の方式については、まず、調査員に対する訓練、説明をそれぞれの場合に適したように（面接調査の方式がそれぞれの社会で同じようになるように）する。このとき、それぞれの社会の社会的な事情に応じた変形がなされる可能性がある。たとえば、面接調査という状況に対する日本、アメリカの一般の人の対応の仕方、あるいは、対応する心がまえが異なるということも考えられるが、この点、異なるかどうかをはっきりさせるだけの具体的資料はない。また、民族、社会階層上の差に基づく影響も可能な限り消去するように考えている。

われわれの用いた方法は、①調査票に書いてあること以外は被調査者にいわない。②質問文を数回くり返しても無答の場合は D. K にし、③誘導的な回答のとり方をしない。また、④複雑な回答が予想され、調査員の判断を要すると見込まれる質問には、回答選択肢を印刷した調査票リスト（Answer sheet）をみせて、回答水準の統一をはかった。

質問の水準は、日本人なら誰でも格別の知識その他がなくても、問題設定の状況を理解できるし、質問文は、水準が高くとも義務教育終了程度の理解力があれば一応の理解が得られる質問文にしてある*。われわれの用いた面接調査の水準は、たとえば Cannell and Kahn の [4]** にのべられている水準であろうと考えられる。

2. 質問票の同等性

つぎは、使用する質問票に関する問題である。

すでに指摘したように、質問作成の方式自体が特定の社会的背景の影響をうける。（完全に客観的にはならず、調査企画者、観察者の偏りが入る）。これはわれわれの研究調査の場合は複雑な問題を提供する。

* 理解度調査 [17] および一般のよみ書き能力からみて、中学2年（8-9 学年修了程度）14 歳前後の学力と考えられる。[16]

** 面接調査の方法としては、基本的には Lansing, Morgan [10] にのべられている方法と変らないと考えられる。

[18], [15], [12] でものべたように、われわれの関心のあることが、外国人には興味がなかったりすることが1つ、いま1つは、回答選択肢が、すでにのべたように一方が伝統的と考えられるもの、他方がそうではないものというように、一応対立したカテゴリで作成されている場合、これをそのまま他の国において適用しても、非伝統的な考え方のカテゴリが、そのままその国の考え方に合致するという事は恐らく、ほとんど考えられないことである。多少ともその社会においては、マト外れの選択肢になるだろうと考えられる。この点は後節でのべるように、われわれの計画した比較の性質上、避けられないことと考えられる。(これについては次節であらためてふれる) このことは、質問項目の焦点をどこにしぼるかという点と関連している。(日本の) 伝統的というところに一方の極をとれば、この方は一応、はっきりするだろうが、他方は恐らくぼやけてくるだろう。しかし、両社会にとって共通の話題になるような項目について考えれば、この点は避けられる可能性がある。もちろん質問項目の翻訳の問題もある。すなわち、他の国で調査する場合、比較可能性を考えて同等な測定手段をとるとき、質問票の翻訳は大問題である。

質問票を一つの言語から他の言語へ翻訳して、それが両方の言語で“同等な測定手法”となるように出来るだろうか、答えは恐らく“否”であろう。われわれが欲しいのは、言葉上の翻訳ではなくて、調査上、同等な翻訳である。ところで同等性とは正確にいうとどんなことであろうか？*

われわれは、まず注意深い翻訳によって、言葉の翻訳から生じる問題を最少にするように考えた**が、更に、ハワイ調査においては両国語が自由に使える人達に対して、それぞれ(同一人に対し)両国語による調査を実施して、面接調査の実際場面から得られた同一人の回答のくいちがいの度合をしらべてみた。この結果多くの場合には調査上からみても同等性が保たれている可能性が強いと考えられた。

翻訳の例として#4.4“先生が悪いことをした”をあげる。翻訳の問題は、1つは、言葉上の質問文として同等に理解されることすなわち、日本文→英文→日本文という翻訳のくり返しによる同等性をみるのも1つの方法である。

日本文は

#4.4 “先生が悪いことをした”***

「先生が何か悪いことをした」というような話を、子供が聞いてきて、親にたずねたとき、親はそれがほんとうであることを知っている場合、子供には

「そんなことはない」

といった方がいいと思いますか、それとも

「それはほんとうだ」

といった方がいいと思いますか？

である。また R. P. Dore 教授による英訳は

Suppose that a child comes home and says that he has heard a rumor that his teacher had done something to get himself into trouble, and suppose that the parent knows this is true. Do you think it is better for the parent to tell the child that it is true, or to deny it?

である。この英文の再翻訳****の一例は“若し、子供が家に帰ってきて、「先生が何か悪いこ

* この問題についてはたとえば [2].

** われわれの調査に用いた質問文は R. P. Dore 教授および西山千氏によって日本語から英語に翻訳されている。それらの英訳調査票は、日本語調査票の原文を全然知らない第三者(両国語に堪能な)によって、再び日本語されたが、原文と英訳を再翻訳したものを比較すると両者にほとんど差はなかった(実例参照)。

*** 以下質問文は、#番号と質問の見出しだけを示すことが多い。この#番号はわれわれの報告書すべてにわたって共通な質問の分類番号である。くわしくは [17], [18] 参照。

**** Mamoru Iga 教授 (San Fernando Valley State College, California) の助手である日系アメリカ人二世による。

とをした」というウワサを聞いてきて、親にたずねたとき、親はそれがほんとうであることを知っています。このような場合、「本当である」といった方がよいと思いますか、「否定」した方がよいでしょうか？」である。両者はよく似ている。

また、回答選択肢の英訳は Dore 教授によるものは

- 1) Better to deny, 2) Better to affirm であるが、ハワイで実際に使用したものは
1) Deny it, 2) Tell the truth である。

日本文は

- 1) 「そんなことはない」という、 2) 「ほんとうだ」という、である。

また上にのべたように日本文、英文両方の調査票を両国語を自由に使える人達に適用して、面接調査としての同等性を考え比較可能性を探るのも1つの方法である(後節参照)。さらに、社会的に同等なものをとるように工夫するのも1つの方向である。たとえば、# 5.16 “一万円の借用書”の質問文で、日本文は

「リスト」あなたが友達から一万円借りたとします。そのとき、その友達が
「念のため、借用書を書いてくれ」
といました。

あなたは、このときどう思いますか？

1. 当然のことかも知れないが、不愉快だと思う。
2. 当然のことだと思う。

西山千氏による文章通りの訳は

“Suppose that you borrowed *ten thousand yen*¹⁾ from a *friend*²⁾, and also suppose that, at that time, this friend said, “Just to be sure, write me out an IOU”. What would you think about this?”

- a) Think it unpleasant, though probably a natural request.
- b) Think it only natural.

であるが、ハワイ調査では、

- 1) を \$ 100.00,
- 2) を an intimate friend,

としている。1), 2) は社会通念上の同等性を考慮したためである。すなわち、この質問文のうち社会的な事情にとくに依存していると考えられるのは、日本における“友達”が、この場合どのような範囲をいうのか、またハワイにおいて英語の“friend”が上の質問文に使われている意味での「友達」という概念に相当するものかどうか？ということ、すなわち、社会通念上、日常の小遣いの2~3倍程度の額(多少の額)なら、気軽に借用を申し込める範囲の友人<友達>が問題になった。われわれは、“an intimate friend”と翻訳している。また社会通念上、借用書を書くかどうかの境界線くらいの金を借りるという場合を想定するとき、この金額も社会的事情に大きく依存していると思われるので、われわれは、プリテストの結果、日本文に用いた1万円をその当時経済的に同等であった28-30ドルとしないで100ドルとした。

また、同等性がないから比較不可能というのではなく、比較可能なような比較の方式を考えることと、比較できるように変換の方式を考えることも必要である(次節参照)。

3. 比較可能性を高める方策

つぎに、比較可能性を主に考えた場合の質問項目作成上の問題点および、結果を解釈する時の問題を考えよう。

前節でのべたような、同等な質問、面接調査場面における同等性を考慮するのは、比較を考える場合の第一段階である。

調査研究にあたって、どのような方式をとるのが比較可能性を高めるか、を次に考えなければならぬ。その1つは比較の対象となる両者にとって同等な次元で考えられるような質問項目を用意することである。このように、特定の社会の事情に影響を受けないような一般的意

見や態度の項目をあつかうことは、(国際)比較の可能性を高めるのに役立つだろうが、どのような項目がそれに当るか、あるいは、そのような項目が“人々のものの考え方”の異同をはかるのに役立つのは、どのような範囲の項目であるのかはあまりはっきりしていない。

一例としてわれわれが作成した質問項目の1つをとり上げてみよう(＃4.10)

質問は、“子供がないときは、たとえ血のつながりがない他人の子供でも、養子にもらって家をつがせた方がよいと思いますか、それとも、つがせる必要はないと思いますか？”というのである。

この問題は、家名存続の問題をあつかっている。

日本人のものの考え方の断面として、それを国民性という言葉で示すとき、以前は、家族制度とか家の問題というもの、日本人のものの考え方に大きな影響をあたえているものと考えられていたが、現今ではそうではないだろう。したがって、このような社会的事情を考慮して設問されたこの質問項目では、回答者が伝統的な家族制度の存在を念頭において回答するものという期待がある。このような場合には“つがせる”という回答は家族制度にプラスの考え方、“つがせない”という回答は、家族制度に否定的な考え方であるという社会的な事情に直接結びつけて考察されてしまう可能性が強い。また、前者は伝統的な考え方、後者は新しい考え方というような対立した概念を含むものとして解釈される可能性も強い。この意味からいって、年齢層別にみて、若い層程後者の意見を示す比率が高くなり、前者の伝統的な考え方は、高年齢層程支持率が高いだろうという予想もできる。しかし、家族制度というようなものが、社会的に存在しない社会においては、家族は、夫婦を主体にして構成されるものと考えるのであるから、子供の有無がこの夫婦の将来にとって、どういふ影響を与えるかという判断の方が優先する可能性が強いらる。この場合には、ある人は子供がなければ老後がさびしい、あるいは、子供を育てる楽しみのため、他人の子供を養子にすると回答するだろうし、そのような必要がなければ、他人の子供を養子にはしないと回答するだろう。したがって、“養子につがせる”、あるいは“つがせない”という回答には、どちらも、伝統的とかその他の比喩的概念は入ってこないだろう。もちろん、現在の日本でも、家族制度を念頭において回答する人は、ほとんど限られた層であるに違いないが、“つがせる”という回答は、伝統的な考え方のニュアンスを残し、“つがせない”という回答が伝統的ではないという考え方だ”というようにこの質問を理解して、この面からの回答選択をする層がかなり存在することも予想できる。したがって、この質問項目は、回答選択肢に伝統的意見、非伝統的意見の対立概念が含まれている他の質問項目と関連が深くなることが期待される。家族制度が考えられない社会では、他の質問との関連を考える場合、このようなことはないだろうから、質問項目相互の結びつきにも差がみられるだろう。このように、質問項目にとり上げる意見や、態度が、特定の社会的な事情に深く依存して構成される場合には、それぞれの社会的な背景にある事情をこまかく考えに入れることが、分析上、非常に有利になる。しかし、これはまた、比較するという観点からは、非常に大きな困難な問題を提出することになる。もちろん、われわれが質問に取り上げる意見や態度というものは、部分的には社会的に決められてくる。すなわち、社会構造の性質によって影響されるような意見や態度について研究せざるをえなくなると考えておいた方が、上のべた例をみるまでもなく多くの場合安全である。

研究調査における比較可能性を大きくするには、いろいろな方法があるが、その1つは、いまのべたことから分るように、社会状態の構造によってきめられる部分のごく少ない意見や、態度に焦点をあてるのがよいと考えられる。しかし、このことは逆にいえば、あまり社会の構造が異なっていて、その影響により、両者の比較が困難になると考えられるような場合には、比較的構造に影響されないような意見や態度の項目を考えて比較すること自体、それほど意味のあることにはならないだろうとも考えられる。社会的な事情に、全く影響されないような質問項目は、実際には考えられないだろうから、ある程度、社会の構造に関連するような調査項目を用いても、何らかの意味で比較可能性を高め、比較することが出来れば、われわれの研究に

とっては実り多いものになると考えられる。この場合、もちろん、技術的な意味における比較可能性は事前に十分考えられていることが前提である。すなわち、事前に社会構造の相違により、一方では全く問題にならないというような事柄、あるいは、考えられないような意見や態度、等は排除し、身近かに考えることが出来るものを問題にして、しかも、それが比較の対象となる両社会の社会構造の違いを質的な差としてではなく、程度の差として反映するようなものが望ましい。しかし、このことは翻訳の問題同様に困難なことである。実際、このようなことを実行するために最も重大なことは、それをやってみなければ、そうになっているかどうか分からないからである。

現実には、なかなか理想的にはいかないで、その場合には文字通りの（得られた数値そのものの）比較可能性が多少損われることになる可能性が強い。したがって、直接的に両者を比較するのではなく、質問の相互関係から比較をすることが有利になる。

たとえば、ある意見に賛成の人の比率をくらべるのではなく、それぞれの社会における部分集団の間* の差異を比較する。このようにするのは、それぞれの社会の間で意味するところが異なっても、各社会の内における相対的な位置関係は、比較的安定しており、比較可能性が増すと考えられるからである。

§ 3 単純集計を用いる比較

調査の結果から“日本人のものの考え方”について分析を進める場合、すでにのべてきた** ように、まず、回答分布そのものについては

- ① 多数意見をとり出す
- ② 回答分布の時間的安定性および変化の模様をしらべる
- ③ 他の文化に属する人達との比較により、共通性および差異をしらべる

等の分析が考えられる。①は日本人のものの考え方の特徴を示す可能性が高いものとして一応考慮される*** が、これについては [17], [18] および [15] を参照されたい、②もすでに [18], [14] において、日本国内の結果は詳しくのべられている。

ここでは③について、分析の手始めとして、前節でのべたような比較可能性を考慮しながら、すこしふれておく、一部分はすでに [12], [15] で一応のべてあるが、そのときとり上げなかった調査上の同等性および、調査対象の同等性の問題から考えよう。

§ 3.1 調査の同等性の吟味

1. 面接調査の同等性

翻訳上の問題点はすでにみた通りであるが、調査結果の比較可能性を考える場合、面接調査

第1表 仮 想 例

| | | 日本国内の調査 | 両国語に堪能なグループ | | ハワイの一般日系人の調査 | 調査結果の解釈 |
|----------|-------------|---------|-------------|----|--------------|----------------|
| 使用言語 | | 日本語 | 日本語 | 英語 | 英語 | 日本とハワイ日系人の意見の差 |
| 調査結果 (%) | 質問Aの yes 回答 | 60 | 60 | 40 | 40 | 差なし |
| | 質問Bの yes 回答 | 60 | 50 | 50 | 40 | 差あり |

* われわれは、両社会の内部における社会的集団として、主として個人の属性による社会集団（たとえば性別、年齢別、学歴別等に分割した集団）を考えることにした。

** [17], [18] も参照。

*** 質問項目の中には、世界中どこでも共通に多数意見というものもある。たとえば、“幸福だ”という感情に近い意見は、その一つである [17] 参照。

の実際場面を通した上での同等性が望まれる。これは必ずしも期待できないが、比較可能性がまったくないわけではない。

第1表にあるような仮想例についてみると、中央の両国語に堪能な人達の集団から選んだ被調査者には、両国語による調査をおこなう。A, B 両質問項目の調査結果について、その“賛成”の回答比率が日本およびハワイ日系人調査で、いずれも、日本では60%、ハワイ日系人の場合40%であったとする。

このとき、両国語に堪能な人達に対する調査結果は質問Aでは、日本語を用いたときの“賛成”の回答は60%、英語を用いたときの回答は40%、質問Bでは、日本語、英語のどちらの調査票を用いたときも賛成率は50%であったとする。質問Aの場合は、日本の調査およびハワイ日系人の調査における“賛成”の回答(60%および40%)の差が、丁度、両国語に堪能な人達に対しておこなった両国語を用いた調査の回答の差と同じであるから、実質的には、日本とハワイの両調査の差はないと考えられる。一方、B質問の場合は、翻訳その他調査法上の差はない(両国語の出来るグループに於いては差がない)にも拘らず、両国語を用いた一般調査の結果には差がみとめられたので、実質的な差があると考え*、という方法である、このようにして、実質的な比較をおこなうことができるように、両調査の結果データを変換することが可能であると考えられる。しかし、実際に用いた質問票について、両国語に堪能な人達を被調査者にして、吟味調査をおこない、このような検証手段をとり、比較可能性(調査結果の変換可能性)について分析を進めているが、まだ両国語の出来る人達に対する調査資料が十分収集されていないため、この問題は将来に残されている。

2. 調査対象の同等性(構成比率の標準化)

どの点まで調査対象の同等性を要求するかということは、いろいろ問題になるところであろう。

第2表

| 項 目 | | 日本(1968年) | ハ ワ イ |
|-----|--------|-------------|-----------|
| 性 | 男 | 47 | 53 |
| | 女 | 53 | 47 |
| 年 齢 | 20~24歳 | 12 | 16 |
| | 25~29歳 | 13 | 12 |
| | 30~34歳 | 13 | 8 |
| | 35~39歳 | 13 | 7 |
| | 40~44歳 | 11 | 15 |
| | 45~49歳 | 8 | 13 |
| | 50~54歳 | 7 | 11 |
| | 55~59歳 | 7 | 10 |
| | 60歳以上 | 16 | 8 |
| 計 | | 100 (3,033) | 100 (434) |

われわれは被調査者の属性に関する項目のうち、性、年齢という比較の際に分類の基準がどの社会においても同等性について、まぎらわしくない項目についてのみ、比較をおこなう両調査の調査対象の構成が同じようになればよいと考えた。

しかし、現実には、両調査の対象となる確率サンプルの構成が、(母集団)全体における構成上の差異を反映して、異なっている場合も多いだろう。日本の調査とハワイ日系人の調査結果をみても、第2表に示されているように、両調査対象の構成は異なっている。両調査の結果を比較するとき、両者の構成を標準化して比較する必要がある。すなわち、全体についての回答分布(すなわち単純集計)の結果を比較するとき、

直接両者の比較をしないで、たとえば年齢構成をそろえた上で比較するわけである。

ハワイの日系人調査の結果を標準化**して、これを、ハワイ日系人調査の単純集計結果と比較してみると、多くの質問項目に対する回答結果は、生データ(単純集計値)と標準化した数値とはほとんど同じ(1~2%以下)数値を得た。これ以上差のある回答カテゴリを列挙すると、第3表の合計5カテゴリであった。したがって、日本とハワイ日系人の調査結果を比較するとき、わざわざ標準化しなくとも、調査結果そのまま、大勢の比較には十分であろうと考

* もちろん、ここでは標本誤差や、被調査者の構成上の差はないものと仮定して考える。

** 標準化は、性、年齢構成を、日本の調査(1968年)の回答者の構成比率に合わせるようにしておこなった。

第3表 標準化した回答比率と生データ(単純集計)との差の大きな項目 回答カテゴリ

| 差(標準化した値と生のデータの) # 項目 | | | 回答 カテゴリ |
|-----------------------|---------|-----------|--------------------------|
| 4% | # 7.5 b | 公益と個人の権利 | 公益を重視せよ |
| 3% | # 7.2 | 心の豊かさ | 賛成 同じ 時と場合 よくない |
| | # 7.7 | 仕事の価値 | |
| | # 8.2 h | 「社会主義」よいか | |
| | # 8.2 h | 「社会主義」よいか | |

えられたので、以下の分析では、標準化計算をおこなわないまま比較している。

§ 3.2 日本の調査とハワイ日系人調査の単純集計結果の比較(回答カテゴリの分類と、この分類を用いる比較)

個々の質問項目についての比較は、すでに [15] でのべてあるし、こまかい数値は、[19] および付録の項目分析一覧表を参照していただくことにして、ここでは、より総括的な分析を試みよう。そのため、まず、質問の項目および回答選択肢(回答カテゴリ)の分類について考える。

1. 質問項目、および回答選択肢の分類

各質問項目の回答分布を問題にすると、それぞれの項目の回答選択肢のグループ分けをおこなっておけば、結果を整理するときの見通しがよくなるだろう。

たとえば、あるグループ分けにより、一群の質問項目について、その回答選択肢(カテゴリ)が、“伝統的な意見のカテゴリ”(あるいは“日本的な意見のカテゴリ”)、および“非伝統的(近代的?)な意見のカテゴリ”(あるいは“非日本的(西欧的?)意見のカテゴリ”)等と分けることができたとすれば、

“伝統的意見はハワイ日系人の間では減る”とか、“日本的な意見はハワイの日系人の高年層程支持率が高い”とか、“日本語の出来る人はど“日本的意見”に傾く”等の具体的な分析が可能になる。もちろん、各質問項目、各回答カテゴリの分類の方は、一定の角度からあらかじめもって分類しておかなくてはならない。そうでなければ、このような分析の意義はあまりなくなってくる。

比較の対象が、日本とハワイ日系人の間であるから、分類も“伝統的カテゴリ”と“非伝統的カテゴリ”の分類*を主に考えよう。

分類の基準：

- ① 質問項目作成上の仮説(意味内容)による分類：[18]にある分類はほぼこれにあたる。
- ② 主観的な分類：たとえば、われわれがとり上げた質問項目を、とり扱う内容によって9分類にして個人的態度の項目とか、政治的態度の項目とかに分け #2.1 等としているのはこれにあたる。
- ③ 操作的な分類：日本国内の調査結果を利用して、つぎのような質問および回答カテゴリの分類をすることができる。
 - a) 多数意見** かそうでないかによる回答カテゴリの分類：
 - a-1) 多数意見として回答比率 50% 以上をとる場合
 - a-2) 同じく 70% 以上のカテゴリをとる場合
 - b) 経年的な変化の傾向による分類：経年的にみて減少する意見のカテゴリをたとえば、“伝統的意見”とする。
経年的にみて増加する意見のカテゴリを、“非伝統的(あるいは近代的)意見”とする。
 - c) 年齢別にみて差(傾向差)のある意見のカテゴリについて

* このような分類の例は、すでに [17], [18], [14], [15] においても、一部の質問群についてとり上げている。

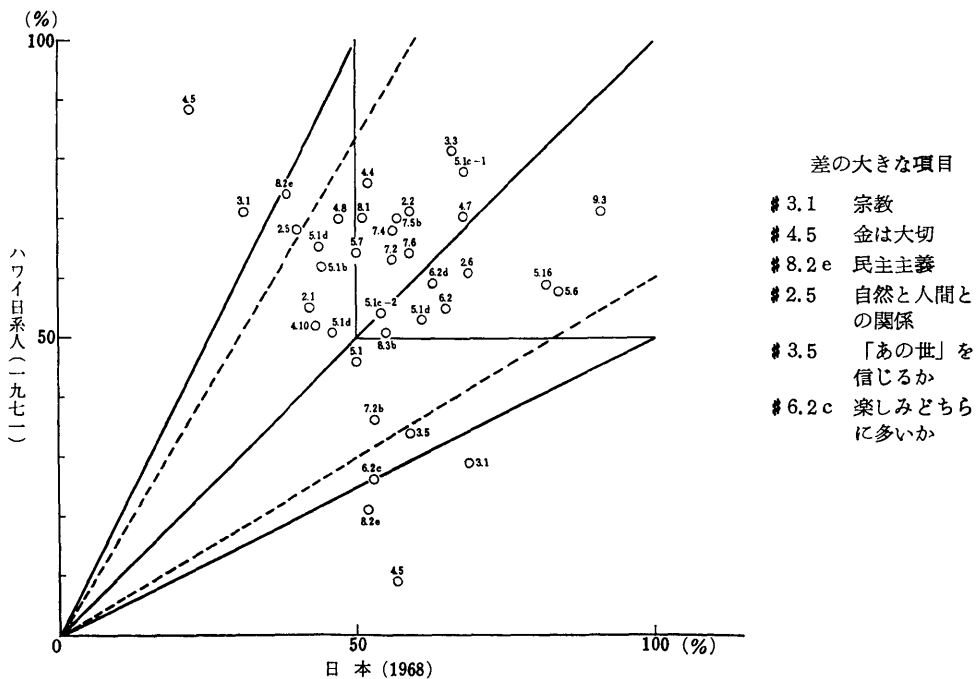
** 多数意見の定義は [17], [18] をみよ。

高齢層程支持する比率の高くなる意見を，“伝統的”意見のカテゴリとする。逆に、高齢層程支持する比率の減少する意見を，“非伝統的（あるいは近代的）”意見のカテゴリとする

等である。このうち①、②は分析結果を解釈するとき、一般化する場合、あるいは将来の予測等をおこなう場合に主観的な面が残るかも知れない。分類の③は、日本国内における、これまでの調査結果を用いて、一意的にきめることができる。

2. 「多数意見に基づく分類」を用いる比較

(3-a) の多数意見に基づく分類を用いる比較は、日本とハワイ日系人の“ものの考え方”の現状が似ているかどうかを全体的に概観するのに役立つと考えられる。すなわち、日本において50%（あるいは70%）以上の支持率のある意見のカテゴリがハワイ日系人にも多数から支持されているとすれば、日本とハワイの“ものの考え方”は大筋としてよく似ているとみられるし、日本における多数意見が、ハワイでは支持率が低い、あるいは逆に、日本で多数の支持が得られない意見がハワイ日系人の多数から支持されるという場合が多ければ、日本とハワイ日系人の間の期待の gap は大きいと考えられる。というのは、多数意見を50%以上とすれば、日本では2人のうち1人がその意見を支持すると期待され、70%以上とすれば3人のうち2人は支持すると予想できるわけであるから、誰かに出会ったとき、あらかじめ前もって予想として多分“この意見には賛成するだろう”ということが期待できるわけであるが、ハワイで同じようになっていなければ、絶えず予想（期待）を裏切られることになるからである。日本における多数意見をとり出し、横軸に日本の1968年の回答比率を、縦軸にハワイ日系人調査の比率をとると、各質問の各回答カテゴリは、図上では、1つの点として表わすことができる。このような点打ちをして、# 番号をそえたものが第1図である。日本とハワイとの比率の差は図上の点の位置で示される。すなわち、45°の直線附近は、両調査結果の間に差はなく、この直線の右下にあるものは、中心線より離れるほど、日本の方がハワイよりその意見を支持する率が高いカテゴリであり、逆に左上はハワイの調査結果の方が日本の結果より支持率が高い意見ということになる。



第1図 日本⇔ハワイの多数意見による比較 <50% 以上>

日本における多数意見がそのまま日本的特徴ということになるかどうかをみると、右上四分分のところに多数のカテゴリ（点）が集まり、全体的には、日本、ハワイ日系人の両者が似ている面が多いということが出来るだろう。

すなわち、日本および、ハワイ日系人の間には共通の“多数意見”が数多くあることが分るので、日本（ハワイ日系人）の多数意見がそのまま日本（ハワイ日系人）の特色ということにはならない。

しかし、図の点はかなりばらついており、とくに日本とハワイ日系人の間で差の大きい（図中の下の鎖線の右下および上の鎖線の左上）カテゴリは、それぞれ日本、ハワイの特徴を示す意見であるともいえる。これは、それぞれ対になっているカテゴリで占められており、すでに [15] でのべたように、

| | 日 本 | ハワイ日系人 |
|---------------------|-----------|--------|
| # 3.1 “宗教を信じるか” | “信じない” | “信じる” |
| # 4.5 “子供に金は大切と教える” | “教えるのに賛成” | “反対” |
| # 8.2e “民主主義よいか” | “時と場合” | “よい” |

等の項目で、まず表面的には日本とハワイとの差異が大きく感じられるというところであろう。

ところで、多数意見の図は、日本の方が比率の高いカテゴリと、ハワイの方が比率の高いカテゴリの両方があり、全体としてバラバラになって、その傾向をはっきりつかむことが出来ない。

これは、たとえば上に述べた #3.1 “宗教を信じるか” の項目では、“信仰を持っていない” というのは日本の多数意見であるが、一方、“信じる” という意見はハワイの多数意見となるというように相対立する正反対の意見が、同じ図の中に一緒に描かれているためでもある。

これらの点をもう少し見通しよくするため、こんどは、“伝統的な意見” と、そうでない意見とに分類してその差異をみることにしよう。

3. 日本の調査資料の回帰分析の結果を用いる回答カテゴリの分類

(3-b) および (3-c) の分類はまとめて考えることができる。というのは、これまでの4回にわたる日本国内の調査の結果からみると、ある特定の質問群については、両者の間に一定の関係があるからである。すなわち、

タイプ A： 経年的にみて回答比率が減少する傾向を示す意見のカテゴリは、年齢別にみたとき、高齢層ほどこの回答を支持する率が高い

逆に、

タイプ B： 経年的にみて回答比率が増加する傾向を示す意見のカテゴリは、年齢別にみたとき、高齢層ほど、この回答を支持する率が低い

という一定の関係を示す*。

この関係は、年齢（5歳間隔ごとにまとめた11分類）と調査時期（5年ごと4回）を用いる重回帰分析の手法により解析的に示すことができる。すなわち、 i 調査時期における j 年齢層の示す回答比率を y_{ij} ($i=1, \dots, 4; j=1, 2, \dots, 11$) とし、これを

$$\hat{y}_{ij} = a + bt_i + cx_j \quad a, b, c \text{ は係数}$$

により推定するとき、 t の係数 b と、 x の係数 c の符号の組合せ** は、下表のようになる。

| 係 数 | b | c | カテゴリーの分類 |
|----------------|----------|----------|--------------|
| 符 号 の 組 合 せ | - | + | タイプ A に相当 |
| | + | - | タイプ B に相当 |
| | (+ -) | (+ -) | 例外的 (ほとんどない) |

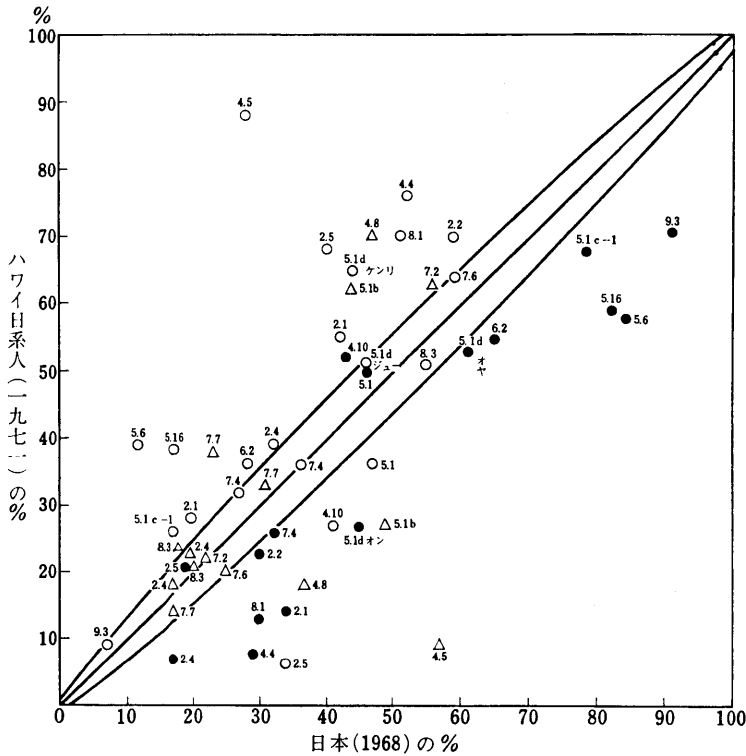
* くわしい分析は [18], [14] をみよ。

** (-, +) および (+, -) の組合せが支配的で、しかも、過去2回の分析では調査時期によらず安定していることは [13], [14], [18] の回帰分析一覧表をみよ。

したがって、われわれは質問項目の各回答カテゴリの分類を、上記の表に示した符号の組合せに基づいておこなうことにした*。この場合、このような回帰分析がうまく当てはまらないと考えられるカテゴリ（重相関係数 0.6 以下）はその他の分類（タイプC）としておく。

この分類を、タイプAを●印、Bを○印、Cを△印にして、付録の項目一覧表に示しておく。これはまた [17] にある回答カテゴリの分類をそのまま含むものである*。

さらに、ここで注意しておく、“このような回答カテゴリの分類が可能である”ということ自身が、“日本人のものの考え方”の構造についてのいちじるしい特徴の一つと考えられるということである!! すなわち、日本以外では、ここで用いた質問群をとり上げて、このような係数の組合せだけが出現することはないものと思われる。



第2図 伝統的・非伝統的意見
日本とハワイ日系人の比較

1. 多数意見 (70% 以上), および大切な道徳
 - : 多数意見 (日本の特徴を考へるとき日本的な意見として考へる) および大切な道徳のうち '親孝行', '恩返し'.
 - : 多数意見と対になっている少数意見および大切な道徳のうち '権利の尊重', '自由の尊重'. 多数意見4項目および '大切な道徳' (# 5.1 d)
 2. 回帰分析の結果から
 - タイプA ● : 回帰分析において時勢の影響は (-)
年齢の影響は (+)
 - タイプB ○ : 回帰分析において時勢の影響は (+)
年齢の影響は (-)
 - タイプC △ : それ以外および回帰係数 0.6 以下
- 回帰分析をおこなった 19 項目について (質問項目のうち比較可能な) (# 5.6, # 9.3 は重複)

* 回帰分析による b, c の詳しい数値は [13], [14] および [18] にある。とくに [18] の p.263~p.279 の所論により、上記の分類は①の分類もその中にそのまま含むことが示されているので、タイプAは“伝統的”, タイプBは“非伝統的(近代的?)”という呼び名をつけて分析を進めることが日本国内の結果分析の場合には可能であると考えられる。

4. 回帰分析に基づく回答カテゴリの分類を用いた、日本とハワイ日系人の意見の比較

回帰分析に基づく質問項目の分類は、タイプAはほぼ“伝統的”な意見のカテゴリに対応し、タイプBは逆に“非伝統的”な意見に見合うものと考えられた。そこで“伝統的”という点に焦点をあてて少し分析をしてみよう。＜日本的＞という場合、多数意見による分類（第2節）のところで考えたように、日本の調査結果が70%以上の支持率になるカテゴリは、一応日本人のものの考え方の特色を示す可能性が強いと思われるので、ここではそれらも一括して考えることにする。（この場合、回答選択肢の一方が70%以上の多数意見になった項目の対立するカテゴリは非日本的と考えておく*）。その他、#5.1d“大切な道徳”の“親孝行”、“恩返し”は“伝統的”なカテゴリ、“権利の尊重”および“自由の尊重”は非伝統的なカテゴリと考え、ここで一緒に示してみる。

これらの回答カテゴリについて、多数意見の場合と同様にして、横軸には日本の調査比率を、縦軸にはハワイ日系人調査の比率をとり、各回答カテゴリを点打ちしたものが第2図である。

図をみると、日本の調査における多数意見（70%以上）はハワイでは多少比率が低くなり（45°の直線の右下に位置する）、タイプAの回答カテゴリ（●印）では、日本の方が比率の高いカテゴリが多く、逆にタイプBの回答カテゴリ（○印）は、左上に位置するものが多いになっている。

全体的な模様をみると、伝統的（日本的）な意見はハワイ日系人の間では少い傾向にあるといえるだろう（これは当初の予想の1つである）。

しかし、日本では典型的な“伝統的”あるいは“非伝統的”意見としての傾向を示している#4.10“養子につがせるか”の質問項目における回答の“つがせる”（伝統的）、という意見は日本よりハワイ日系人の回答比率が高くなり、逆に“つがせない”（非伝統的）という回答比率や、#5.1“恩人のキトクのとき”の“会議に出席”、#2.5“自然と人間との関係”で“自然を征服”という回答比率等は、ハワイ日系人に比べて日本の調査における回答比率の方が高くなっている。すなわち、これらの回答カテゴリは全体的な傾向とは反対に、日本よりハワイ日系人の方が、ここでいう“伝統的”な方に寄っていることになる。

したがって、単純に“伝統的な意見はハワイ日系人の間では少い”とはいえないことになり、われわれの予想は直接的には当らなかったことになる。（後でこの問題をもっと詳しく論じよう）

§ 3.3 両調査結果の差の相対的な大きさ

すでにみてきたように、現在の日本において多数の人から支持される意見というのは、それなりに現時点における日本人の‘ものの考え方’の特徴を示しているのであるが、日本人の‘ものの考え方’というものを考えた時、これまで多数の人から支持されていた意見が時期にかかわらず多数意見であることもあるし、あるいは逆に過去においては少数派であった意見が、時勢の影響により、あるいは調査対象が新しい教育を身につけた若い世代にひろがるにつれて過去の多数意見にとって代って多数派になっていることも考えられる。

また、これまでの日本の調査結果により年齢別にみた意見差の傾向と、回答比率の経年的変化の模様とは一定の関係があり、前項でみたようにその関係に応じて、各回答カテゴリをタイプA、およびタイプBと分類することが出来、タイプAに属している回答カテゴリは経年的にみて減少し、かつ高年齢層ほど支持率が高い。これらの意見は‘伝統的’なものと思ふことができた。したがって、‘伝統的’とみられる意見に着目すれば、現時点では多数意見である可能性はあまり多くない。さらに、次節でもふれるように日本においては年齢別にみた意見差のあり方と学歴別にみた意見差のあり方もほぼ一定の関係がみられ、上のタイプAに相当する意見は、学歴別にみれば‘低学歴層ほど支持する’という形になる。ここで、変化の全体の過程をのべるのは横道にそれるのでここではのべないが、‘伝統的’という分類に入る意見の変化は

* 後節の分析でみられるように、多数意見だからといって“伝統的”というグループとして取扱えるというものではない。“伝統的”と考えられる他の回答カテゴリとの関連を考えると不合理なところが出て来る。

まず高学歴層から、そして若い年齢層から‘非伝統的’な方向へ進むものと予想され、その要因として近代化、産業化の過程における西欧的‘ものの考え方’とのふれあいが想定される。このように考えれば、日本的な‘ものの考え方’を特徴づける意見、あるいは‘伝統的’な意見として、これまでに考えてきたものばかりでなく、“ハワイ日系人調査の結果と比較したとき、ハワイ日系人の間では日本よりさらに減少している意見”を1つの可能性として考えることもできるであろう。もちろん、ただ単に差をとるよりも変化率のような指標の方が、比較には好都合である。したがって、ここでは、日本の調査における、ある意見の比率を P_J とし、ハワイ調査の同意見の回答比率を P_H としたとき、1) $(P_J - P_H)/P_J$ および、2) $(P_J - P_H)/(P_J + P_H)$ の値を指標としてとり上げる。1) は日本における調査結果を基準にして日本およびハワイの両調査における回答比率の差がどのくらいの割合になるかを示す量で、この値がプラス1に近ければそれだけその回答は‘日本的’ということもできるだろう。また、マイナスの値が大きい程‘非日本的’となるが、マイナスの値はいくらでも大きくなる可能性がある。2) は日本調査とハワイ調査の平均的な回答比率の大ききで両調査における回答比率の差の大ききを標準化したものといえる。この値がプラス1に近ければ上の場合と同様に‘日本的’な意見といえることができるだろう。逆にマイナス1に近ければ‘非日本的’な意見といえることができる。2) の場合には、指標の値は ± 1 の間にある。

第4表 日本のおよび非日本の意見の例示

| | # | 項 目 | 回 答 カ テ ゴ リ | $(P_J - P_H)/P_J$ | $(P_J - P_H)/(P_J + P_H)$ | タイプ |
|-----------------------|------|----------------|---------------|-------------------|---------------------------|-----|
| 日 本 的 意 見 | 4.5 | 子供に金は大切と教える | 賛 成 | 0.84 | 0.73 | その他 |
| | 2.5 | 自然と人間との関係 | 征服する | 0.82 | 0.70 | B |
| | 4.4 | 先生が悪いことをした | “そんなことはない”という | 0.72 | 0.57 | A |
| | 2.1 | しきたりに従うか | 従 う | 0.59 | 0.42 | A |
| | 2.4 | くらし方 | 清く正しく | 0.59 | 0.42 | A |
| | 8.2e | 「民主主義」よいか | 時と場合 | 0.60 | 0.42 | — |
| | 8.1 | 政治家にまかせるか | まかせる | 0.57 | 0.40 | A |
| | 4.8 | 結婚式・葬式盛大に | よくない | 0.51 | 0.35 | その他 |
| 非 日 本 的 | 5.6 | めんどろみる課長 | めんどろみない課長 | -2.25 | -0.53 | その他 |
| | 4.5 | 子供に金は大切と教える | 反 対 | -2.14 | -0.52 | B |
| | 5.16 | 100ドル(1万円)の借用書 | 不 愉 快 | -1.24 | -0.38 | — |

このような値を各回答カテゴリごとに計算して、プラスの大きな値を得たもの、マイナスの大きな値を得たものを列挙すると第4表のようになる。これを見ると‘日本的意見’と考えられるものは前項でタイプ A (‘伝統的’) と分類されている意見が多くなり、#2.5 ‘自然と人間との関係’の‘征服する’という回答以外では、常識的にみて‘日本的’意見と考えられるようなものが並んでくる。

また、非日本の意見の第1に#5.6で‘めんどろをみない課長’という、西欧的タイプの課長が上ってくるのも面白い。これは又、‘めんどろをみる課長’が日本の何時も変らぬ多数意見であることを考えにいれると一層ハワイの特徴を示しているものと考えられるだろう。

§4 クロス集計を用いる比較

前節でみたところでは、(質問項目)回答カテゴリの操作的分類によるグループ分けで、“伝統的”と分類された回答カテゴリのグループについて、日本の調査結果とハワイ日系人の調査結果を比較してみると、ハワイで比率の少い項目もあれば、逆に多いものもある。一方、“非伝統的”と分類された回答カテゴリのグループでも事情は同じようになる。

表面的にみれば、ハワイ日系人の間にも古い日本的なものの考え方が残っている、ということになるかも知れないが、必ずしもそうとばかりはいえない。

ここでは、まず、日本およびハワイのそれぞれにおいて、各個人の属性および日常生活のパターン等の基本的項目がどのように“人々のものの考え方”の差異あるいは類似性と関係しているかをみることにしよう。

基本的項目を2つのグループに分ける。一つは、日本とハワイの両方について、ほぼ同じ次元で共通に比較することができるような項目（性、年齢、学歴）を考える。いま一つは、ハワイ日系人の“日常生活における日本との関連の深さの程度”である。

これらの基本項目と、各質問の回答比率との関連をみよう。

§ 4.1 基本項目別分析 —— 日本とハワイに共通の項目（性、年齢、学歴）別にみた意見の異同

1. 分析の手順

われわれは基本項目別分析を、つぎのような一般的手続きによっておこなった。たとえば、性別分析では、各質問項目の各回答カテゴリについて、その回答カテゴリを支持する比率を、男と女の各サブグループの間で別々に求め、各サブグループの比率の間で、

- ① 統計的な有意差の有無をしらべた
- ② 有意差のある項目について

男のサンプルの示す回答支持率が女のサンプルの示す支持率より、高い場合と、逆に低い場合を区別し、(これを有意差の向きという)、日本とハワイとで、この傾向が同じかどうかを考察した。

すなわち、日本においては男性の方が女性より高い支持率を示すような意見のカテゴリが、ハワイ日系人の間では、やはり日本と同じように男性の方が女性より支持率が高いのか、あるいは男性と女性の間には支持率の差はないのか、あるいは逆に、女性の方が男性より、その回答を支持する比率が高いのかどうかを各質問項目ごとにみようということである。

結局、分析は各基本項目別について、

- ① 日本とハワイとの間で、有意差のあり方（どの項目（回答カテゴリ）に有意差があるか、質問項目の分類において、どの部分にどれだけの有意差のある項目があるか）の異同を比較する
- ② 有意差の有無および、有意差の向きが同一質問について、日本の結果とハワイ日系人の結果と同じ傾向を示すかどうか

をしらべることにした。

有意差の検定は、年齢別では20歳台の年齢層と60歳以上の年齢層（ハワイでは50歳以上）の間、学歴別分析では、義務教育修了相当層（日本では小学、中学卒業層、ハワイも小、中卒の層）と大学卒の層（ハワイではカレッジ以上の層）との間でおこなった*。

2. 有意差のある項目（カテゴリ）数

有意差のある回答カテゴリの数は、第5表のようになる。性別分析による有意差の有無の比率が日本とハワイで多少異なる他は、年齢別にみても、学歴別にみても日本とハワイの間で有意差の数にあまり相違はなく、どちらの場合も、この三つのうちでは、学歴が一番人々の意見の間に影響を与えるものであると考えられる**。

つぎにその内容を考えてみよう

各質問項目を、質問にとり上げた形式的内容によって分類し***、その分類ごとに有意差のあるカテゴリの数を比較してみよう。

* どの質問項目のどの基本項目別分析の有意差検定により差があるかどうかは付録の基本項目別分析一覧表を参照せよ（そこには各回答カテゴリごとにおこなった各基本項目別有意差検定の結果が一覧表になっている）

** Almond & Verba の“The civic culture”の政治的態度の分析においても、学歴が一番影響力のあることが示されている。

*** 各質問の#番号による分類、[17]、[18] および付録の基本項目別分析一覧表を参照。

第5表 有意差のあるカテゴリの数

| 基本項目 | 日本 (1968) | ハワイ (1971) | 比較したカテゴリ数 |
|------|-----------|------------|-----------|
| 性別 | 42(%) | 26(%) | 91 |
| 年齢別 | 49 | 42 | 93 |
| 学歴別 | 58 | 50 | 93 |

質問分類のうち、「子供・家族の問題」、「身近かな社会の問題」等の身の回りの問題については、日本もハワイも有意差のある項目の数は同じようなものになるが、「個人的態度」や「一般の社会問題」、「政治に関する問題」をみると、ハワイ日系人の方は、性別、年齢別にみて、有意差のある項目数が日本より少なくなっている。

とくに一般の社会問題や政治的問題の項目（カテゴリ）に関する男性と女性の間の意見の相違が日本にくらべて少なくなっている点は、ハワイ日系人のものの考え方の特徴を考える上で記憶しておいてよいことであろう。

個人の信条とか身近かな社会に対する考え方の相違は、日本もハワイ日系人も、性別にかかわらず同じように表現され、これが、性別分析の差の有無と結びついて表われているが、一般的な社会問題、政治的問題等では、日本の場合、(日本の)女性の関心が急速にうすれているという事情が、無答やD.K.の増加となって表われ、これが性別分析における有意差となって表われているといえる。

3. 基本項目との関連の型の比較

つぎに、これらの基本項目とそれぞれの質問項目の回答カテゴリとの間の関連の具合がどのようになっているかをみよう。

性別による差異の型についてみると、日本もハワイ日系人も同じような傾向差のみられる項目（カテゴリ）13%、両方とも同じように有意差のない項目（カテゴリ）50%、一方に有意差があり、他方ない項目（カテゴリ）33%となり、日本とハワイの間で、有意差の向きが逆になる項目、つまり、日本では男のサブサンプルの示す意見の比率が、女のサンプルの示す意見の比率よりも有意に高いのにくらべ、ハワイ日系人では逆に男の意見の比率より女の意見の比率の方が高くなるというような——同一社会の中における各グループの間の相対的な関係が異なるような——項目は4項目にすぎない。

同様に年齢別にみると、同じような傾向の項目は62%（有意差の向きが同じものおよび両方有意差のないもの）、どちらか一方に有意差のみられる項目37%、有意差の向きが逆になるものは1項目（カテゴリ）である。

第6表 有意差の有無とその方向（日本とハワイの比較）

| | 有意差の向き同じ | 一方に有意差あり、他方はない | 両方共有意差なし | 有意差の向きが逆方向 | 比較したカテゴリ数 |
|-------|----------|----------------|----------|------------|-----------|
| 性別分析 | 13(%) | 33(%) | 50(%) | 4(%) | 91 |
| 年齢別分析 | 25 | 37 | 38 | 1 | 93 |
| 学歴別分析 | 31 | 41 | 26 | 2 | 93 |

学歴別にみると、同じ傾向のカテゴリ57%、一方に差のあるカテゴリ41%、有意差の向きが逆のものは2項目にすぎない。（第6表）

これからみると、どの場合も、およそ6割ほどの質問項目では、基本項目との関連の具合が日本とハワイの間では同じようなものになっていると考えられる。一方に有意差がみられるカテゴリは、他方でも、(有意差はないが)はゞそれに沿った傾向がみられる場合と、そうでない場合とがある。ただ、ここでも性別分析における有意差のあり方として、有意差の向きが日本とハワイとで逆の傾向になる回答カテゴリが多いのは、前項でのべた男性と女性の意見の差

がハワイでは相対的に少ないこととあわせて考えると興味のあるところである。

これはまた、[15]でものべたように、#6.2 “男と女の生まれかわり”で、女のサンプルが“女に生まれたい”という比率が、日本にくらべハワイ日系の方が高いことと関連のあることと思われる。

関連の仕方の異なるものを列挙すると、次の表のようになる。これからみると、日本では、“非伝統的”と考えられる項目（カテゴリ）では 男>女であるのに、ハワイでは逆になる点はとくに興味がある。

第7表 日本とハワイで有意差の向きの異なる回答カテゴリ

| 基本項目 | # | 質問項目 | 回答カテゴリ | 日本 | ハワイ |
|-------|---------|--------------|--------|-----------|-----------|
| 性別分析 | 2.5 | 自然と人間との関係 | 自然を利用 | 男>女* | 男<女 |
| | 5.1 c-2 | 入社試験一恩人の子 | 一番を採用 | 男>女 | 男<女 |
| | 5.1 d | 大切な道徳 | 恩返し | 男<女 | 男>女 |
| | " | " | 自由の尊重 | 男>女 | 男<女 |
| 年齢別分析 | 4.10 | 他人の子供を養子にするか | つがせない | 高年齢層<若年齢層 | 高年齢層>若年齢層 |
| 学歴別分析 | 6.2 d | 楽しみどちらに多いか | 男に多い | 高学歴層>低学歴層 | 高学歴層<低学歴層 |
| | 7.13 c | 法律の精神 | 正義のため | 高学歴層>低学歴層 | 高学歴層<低学歴層 |

* 男のサンプルの示す意見の比率の方が、女のサンプルの示す意見の比率より有意に高いとき、男>女と略記する。以下同じ。

全体的にみた場合、このようにごく限られた項目について、基本項目との意見の結びつきのちがいがみられるだけであることは、社会のあり方を全体的な視野で眺めるとき注目してよいだろう。しかし、上にものべた通り、性別分析の差異は一番目につく。これは将来の分析にまたなければならぬが、日本における日常生活パターンが男と女とでは異なっていた時代が過去に長くつづいてきたことと無関係ではないように見える（現在の日本ではほとんど問題にもならないだろうが）。

4. 年齢と学歴による意見の差の比較

つぎに、前項の分析をもう少し進めて、年齢と学歴による意見の差を考えよう。

日本においては「若い年齢層ほど支持する率の高い意見は学歴別にみると、高学歴層ほど支持する比率が高い」し、この逆もまた成立するという一定の構造がみられる場合が多い。（もちろん、これは集団としてみたときのことであるが）

このような典型的な場合に該当する意見のカテゴリが、日本とハワイ日系人の調査結果についてどのようになっているかを全体として眺めてみよう。

日本およびハワイで、年齢別分析でも、学歴別分析でも共に同じ有意差ありなしのパターンを示す回答カテゴリは、比較した93カテゴリのうち38カテゴリ（41%）、年齢別分析あるいは学歴別分析の一方は同じ有意差の傾向がみられるものはやはり、38カテゴリ（41%）、日本とハワイの調査結果において、有意差の有無あるいは有意差の向きの組合せの異なるものは17カテゴリである。（このうち、14カテゴリは年齢別分析および学歴別分析の両方で、両方とも有意差なしから両方有意差ありになったカテゴリである。残りの3カテゴリは、有意差の向きが逆になったカテゴリである）。

この最後のグループが、日本とハワイの比較で、基本項目との結びつきの状況を問題にするとき、一番異なる点の目立つところである。これらを列挙すると、すでに前項でものべたところと同じ項目が並ぶ。

つぎに、これを調査の一方で有意差ありが、他方の調査で有意差なしになるとき1点、他方で逆の有意差があるとき2点というように有意差のあり方のくい違いの度合いを点数をつけて

第8表 年齢別分析, 学歴別分析における日本, ハワイ両調査結果のくい違いの程度

| 日本の調査結果における年齢別, 学歴別分析と各回答カテゴリの関係 | くい違いの点数 | | | | |
|--|---------|----|----|---|---|
| | 0 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 年齢別分析, 学歴別分析 | | | | | |
| + - - + | 19 | 6 | 7 | 3 | 0 |
| - √ + √ √ - √ + | 3 | 20 | 2 | | |
| + + - - | 0 | 2 | 1 | | |
| √ √ | 16 | 10 | 4 | | |
| 合 計 (項目数) | 38 | 38 | 14 | 3 | 0 |

示すことにすれば, 上記の3項目にはそれぞれ3点というスコアがつくことになる。また, 他のカテゴリについて同様の点数をつけてみると, 第8表のようになる。大部分はこの2つの基本項目別分析において1ヶ所くい違いが起るとい程度であることが分る。

また, これらの年齢と学歴の構造的な(社会的な構造としての)結びつき方をみると, 日本の場合

| | |
|--------------------|-----|
| 年齢別分析で差のみられる回答カテゴリ | 49% |
| 学歴別分析で差のみられる回答カテゴリ | 58% |

であるから, 両方の基本項目が全然相互に関連なく各カテゴリと関連しているとすれば, 年齢別分析および学歴別分析の両方に関して有意差のあるカテゴリはおよそ30% (49%×58%) になる筈である。しかし, 実際は35カテゴリ(38%)であるからやや年齢と学歴との相互関連があるというところである。また, 年齢別および学歴別分析の両方で有意差のないカテゴリは30項目(32%)であるから, これも年齢と学歴とが相互関連のない場合の20%とくらべてやや多くなる。両者をあわせて考えれば, 共通の質問項目について年齢と学歴との関連が強くなる傾向が, やや存在するといえよう。

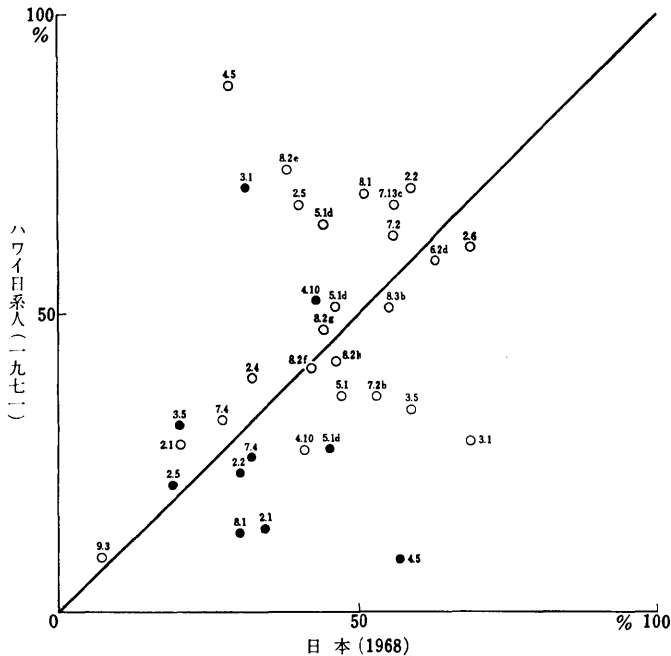
一方ハワイでは, 年齢および学歴別にみて両方共関連の深い(有意差のある)カテゴリは24項目(26%), 両方差のみられないもの39項目(42%)となり, それぞれ, 年齢および学歴の両者が, 相互に無関係に各質問項目と関連していると考えたときの両方有意差のある比率20%, 年齢別および学歴別分析の両方共有意差なしの比率30%にくらべ, やはり日本の場合と同じように, 共通の項目について年齢と学歴との関連が強くなる傾向がある。すなわち, 社会構造的にみて, 若い年齢層に高学歴のものが多い等の影響が若干みられるといえよう。

つぎに日本の場合, 「年齢別にみると若い層ほど, また, 学歴別にみると高学歴層ほど支持する率の高い意見」は「進歩的な(あるいは非伝統的な, 近代的な)」意見と考えられる傾向があるので, そのようなパターンを示す項目(カテゴリ)だけをとり上げて, 日本とハワイ日系人との間の, (全体の)回答比率の比較をしてみよう。

前節と同じように, 横軸に日本における, そのカテゴリの回答比率, 縦軸にハワイ日系人の間における回答比率をとり, 各回答カテゴリを点打ちしてみると第3図のようになり, 図はほとんど回帰分析による回答カテゴリの分類の場合(第2図)と同じようなものになる。

第3図においては, 年齢別および学歴別分析でそれぞれ有意差があり, 若い年齢層ほど支持率が高く, かつ, 高学歴層ほど支持率の高い意見のカテゴリ(記号*では(+, -))は「進歩的」と考えて○印, 逆に(-, +)——高年齢層ほど支持率が高く, 学歴の低い層ほど支持率の

* 付録の一覧表参照。



第3図 年齢および学歴別分析の有意差による回答カテゴリの分類
日本で (+, -), (-, +) のパターンを示すものの日本↔ハワイの%の比較

高い意見のカテゴリ——は“保守的”と考えて●印として示した。

全体的傾向として、●印の意見も日本の比率よりハワイ日系人の示す比率の方が小さくなるという傾向もみられず、○印の“進歩的”の意見の方にも一定の傾向がみられるというわけではない。

また、日本、あるいはハワイ日系人の間では、「進歩的」とか「非伝統的」とかいう意見は「若い層ほど支持する率の高い意見」あるいは「高学歴層ほど支持する率の高い意見」というような、現象面をとらえる操作的考え方から定義するとしても、異なったものになるというのが現実である。

たとえば、日本において、「若い年齢層ほど、また高学歴層ほど支持率の高い意見」を“進歩的”(あるいは「非伝統的・近代的」な)意見と名付けても、ハワイにおいて、年齢別および学歴別にみた意見差のパターンが一致するものは、およそ2/3くらいである。また逆に「高年齢層・低学歴層支持型」…(伝統的)の意見も、くい違いが出てくる。#4.10 ‘他人の子供を養子にづがせるか’の質問では、上の定義に従えば‘づがせない’という意見は、日本では‘進歩的’意見と考えられるが、ハワイではそうならない。また、ハワイにおいては#4.6 ‘子供に自由と規律のどちらを教えるか’で‘規律’という回答カテゴリは‘伝統的’というタイプに入るが日本ではそうになっていない。日本において通用する図式をハワイあるいは他の社会にそのままあてはめると、われわれにとって常識的には納得できないような場合も出て来ることになる。

このことが、恐らく、日本の社会的事情から生じる“ものの考え方”とハワイの、ひいては西洋の社会的事情に基づくところの“ものの考え方”との間のくい違いあるいは相違のもとになるもの1つであろうかと考えられる。しかし、われわれ(日本人)には、それがどのようなものかはっきりとは想定できない。

ただ、ここで、注意しておきたいことは、われわれが“伝統的”あるいは“進歩的”な意見とっているのは、これらを固定的にきまりきったものとして紋切型に考えているのではなく、一定の基準を定めて、調査の結果から操作的に定義してそう呼んでいるだけであるということである。それが、たまたま日本の社会においては社会的な合意が得られる可能性の高いも

のであって、われわれが仮に“進歩的”とか“伝統的”とか名付けていても、多くの人が不思議には思わないというだけのことであるが、このような定義の仕方を採用し、ハワイ日系人の調査結果を分析して、各回答カテゴリの分類をしても、日本においてはそのような合意は得られない可能性もあるということである。

§ 4.2 「日本との関連の強さ」と各人の「意見」との関係

1. 全項目との関係

つぎに、ハワイ日系人の調査結果について、各個人の属性あるいは日常生活のパターンのうち、とくに日本との関係の深さの度合いを測定できるような項目を選び、それらの項目における各人の位置と、各人の「回答（意見）」との間の関連をしらべてみよう。

日本との関連の程度をみる質問項目として、ハワイ日系人調査ではいろいろの項目をとり上げて分析している* が、ここでは典型的なものとして次のいくつかの項目を考えた。

まず、各個人の属性のうち (H5) “世代” (二世と三世の間の比較 (有意差の有無, 向き等)) を、基礎的な社会的態度として、 (#3.1b) “宗教 (何宗) を信じるか?” (“仏教を信じる層” と “キリスト教を信じる層”) の間、あるいはこれらと “信じない層” の間 また、言語の方から (H17) “日本語をどのくらいうまく使えるか” (“うまく使える層” と “うまく使えない層”) の間の三つをとり上げて、前節と同様の分析をおこなった。

全体を通してみると、この三変数のどの場合も、各項目 (回答カテゴリ) との関連の深さ (比較をした各属性間の回答比率の間に有意差のあるカテゴリ数で測る) は同程度で、有意差のあるカテゴリは 30% 程度になり、“宗教” の場合がやや少い。また、日常生活の習慣の 1 つとして、(H1) “日常の呼び名**” が “日本式名前” の層と “アメリカ式の名前” の層とにわけ、両者の間で意見に差があるかどうかをみると、ほとんど差はない (有意差のあるカテゴリは 11% にすぎない)

第9表 有意差のあるカテゴリ数

| 分析にとり上げた項目 | 有意差のあるカテゴリ (%) | 比較したカテゴリ数 |
|------------------------|----------------|-----------|
| 世代別 (二世と三世の間) | 29 | 93 |
| 宗派別 (仏教信者とキリスト教信者の間) | 22 | 93 |
| 日本語能力 (よく出来る層と出来ない層の間) | 30 | 93 |
| 日常の呼び名 (日本式とアメリカ式の間) | 11 | 93 |

2. 伝統的↔非伝統的意見との関係

しかし、全体の質問項目をとり上げないで、質問項目にとり上げた内容的にみて、(伝統的) あるいは (非伝統的) の要素が含まれている質問項目だけを対象にして考える場合には、日本に関連の深いグループ (二世, 仏教信者, 日本語よく出来る, 呼び名日本式) の意見と、そうでないグループの意見の間には、意見の開きが大きい可能性が強いと考えられるので、より一層、有意差が出やすいだろうと予想される。

そこで、前章でとり上げた、回答カテゴリの操作的分類のうち、「回帰分析に基づくカテゴリの分類」を用いて分類した各回答カテゴリについて、上述の意味の意見の差異をしらべてみよう。

この分析における対応の予想は：

“伝統的” 意見 (タイプ A) では日本との関連の深い層ほど、この伝統的な意見を支持する比率が高くなる (有意差検定により有意差があり、かつ、有意差の向きもそうなる)。

逆に “非伝統的” 意見 (タイプ B) は、「日本との関連のない層」ほど、この意見を支持す

* そのいくつかは次の章でのべる。

** これを分析の対象にとり上げたのは、後日、電話帳の記載名および選挙人名簿の記載名をしらべ、地域的な関連をみると共に、地域的にみた意見の異同を推測しようと考えたからである。

る比率が高くなる。

また、(タイプ C) に入る意見には一定の傾向はみられない(恐らく大部分の意見は日本との関連の深い層もそうでない層も両者同じような比率を示すだろう)

である。すなわち、ハワイ日系人の「日本との関連度」(何らかの尺度による)と、その人の示す意見の間には正の関係があるだろう。

この予想は、ある程度は、あたっているといえるが、それ程良くあたっているというわけにはいかない。

ここでとり上げた比較の中では、世代別比較が一番関係が深い(一番はっきりとした差を示す)。

つぎが日本語の能力別になる。宗派の別は、一般に意見の差を作る上では、上の二つの項目と同じような強い影響を示すといえるが、伝統的かあるいは非伝統的かという対立カテゴリーの含まれる質問群に対する回答と宗派の別との関連はかなり少いということが出来る。

第 10 表 対応の予想があっていた場合のカテゴリ数

| 回答カテゴリの分類 | 分析にとりあげたカテゴリ数 | 予想のあたっていたカテゴリ数 | | | |
|--------------------------------------|---------------|----------------|-------|--------|-------------|
| | | 世代別分析 | 宗派別分析 | 日本語能力別 | パターン分類の得点別* |
| 主観的分類 | 45 | 31 | 20 | 26 | 27 |
| 回帰分析に基づく分類 | 45 | 26 | 18 | 24 | 27 |
| 回帰分析による分類、および年齢・学歴別分析における有意差の向きによる分類 | 71 | 42 | 37 | 40 | 47 |

* 第 5 章 2 節以下のパターン分類による数量化に基づく各個人の得点の高いグループ(0.8以上、日本との関連強いグループ)と得点の低いグループ(-0.8以下、日本との関連が弱いとみられるグループ)との間の比較

それぞれの比較分析において、われわれの予想(対応関係の)があっていた場合を示すと、第 10 表のようになる。これらを、ある意味で全体的にみた、パターン分類の得点別にみても同じような数値になる。また、これらの分析で、われわれの予想と実際の傾向とが全く反対になるカテゴリ(すなわち、世代別分析において、二世の意見の方が、三世より伝統的(日本的)といえる意見を支持する比率が低い等のカテゴリ)を列举すると、第 11 表のようになり、世代別分析では、このような場合は 1 つも起らなかった。

第 11 表 対応の予想がくい違うカテゴリ

| 分 析 | # | 項 目 | カ テ ゴ リ | 備 考 |
|------------|------|-----------|---------------|---------------------------------------|
| 宗 派 別 | 4.10 | 養子につがせるか | つがせる つがせない | ここでは日本における回帰分析に基づくカテゴリの分類を対応の基礎としている。 |
| 日本語能力別 | 同上 | 同 上 | 同 上 | |
| パターン分類の得点別 | 2.5 | 自然と人間との関係 | 自然を征服 | |

すなわち、まとめると、日常生活で日本的色彩が相対的に強いとみられる層と、そうでない層との間の意見の開きは、予想される程大きいものではなさそうである。(両グループそれぞれが示す意見の比率の間における有意差のありなしによって判断すると、それ程意見の開きは大きくないといえる)。

むしろ、程度問題ともいえるだろう。すなわち、多くの「意見の分野」において、ここでいう意味における、日本的色彩が強い人達だから、“日本的”な意見をもつとか、というようなこ

第12表 日本との関連の強さによる意見の有意差の有無と、日本⇔ハワイの回答比率の大小

| 日本との関連の強さによるグループ別みた回答比率の有意差の有無 | | | |
|--|---|--|--|
| | 日本との関連の強いグループの方が、この意見を支持する比率が高く、有意差あり (日) > (非) | 両グループの間に有意差なし (ナシ) | 日本と関連の弱いグループの方が支持率が高く、有意差あり (非) > (日) |
| $P_J > P_H$ 日本の方がこの意見を支持する比率が高い | 2.1 しきたり従え 4.5 金は大切と教える 4.10 つがせない 5.1d 恩返し 5.16 借書当然 | 2.4 清く正しく 2.5 自然を征服 4.4 先生の悪事否定 4.8 よくない 5.1 会談に出る | (3.1 宗教信じない)* (7.2b 21世紀かわらない) |
| $P_J = P_H$ 両調査の比率は同じくらいで有意差なし | 2.2 とりやめ 5.1d 親孝行 (5.7 有名な店) | 2.4 金持 2.4 のんきに 2.5 自然に従う 5.1 故郷へ帰る 7.2 心の豊かさへる | 2.1 場合による (5.7 近所の店) 2.4 趣味 (4.7 自由) 4.10 つがせる 5.1d 自由尊重 |
| $P_J < P_H$ ハワイ日系人調査の方がこの意見を支持する比率が高い | (3.1 宗教信じる) (7.2b 21世紀不愉快ふえる) | 2.1 おし通せ 2.5 自然を利用 4.8 身分相応に 5.1b 故郷へ帰る | 2.2 実行 (8.2e 民主主義よい) 4.4 本当のことをいう 4.5 金は大切・反対 5.1d 権利尊重 5.16 借書不愉快 8.1 政治家にまかせぬ |

注：表中 () の意見のカテゴリは、“伝統的” 分類に入れてないカテゴリ

日本とハワイ日系人調査の回答比率の大小

とはなく、(日本的色彩の強い弱いにかかわらず) 一様になってきている、ということもいえないわけではない。

したがって、われわれの分析の前提とした

- a) 回答カテゴリの“伝統的”↔“非伝統的”分類の一貫性 (consistency) および妥当性 (ハワイ日系人の意見を類別する場合にも、日本におけると同様に有効であるかどうか)
- b) ハワイ日系人の個人ベースにおける“日本との関連の度合い”を測る尺度の妥当性について、より詳しい吟味をした上でなければ、いわゆる文化変容の過程に関する議論はあいまいなものになってしまうものと考えられる。

3. まとめ

次章以下でこの点をいま一度とり上げる前に、見通しをよくする意味で、ここにとり上げた意見のカテゴリ(“伝統的”および“非伝統的”の対になったカテゴリを含む質問項目)について、「日本の調査で得られた回答比率と、ハワイ日系人調査の回答比率」の大小関係と、前述の「日本的度合いの程度による意見の開き具合(日本との関連の深いグループとそうでないグループとの間の意見の差(有意差)のありなし)」との関連をみると、第12表のようになる。

日本の方が回答比率の高い回答カテゴリ(表では $P_J > P_H$ で示す)では、日本に関連のある層ほどその回答カテゴリを支持する率が有意に高い(表では(日) > (非)と示す)傾向が、いくつもの項目(カテゴリ)について認められ、反対の傾向を示すものはない(ここでとり上げた項目以外のたとえば、#7.2b “21世紀はかわらないかどうか”の項目のように、“伝統的”対“非伝統的”という観点のない項目では、逆の傾向のみられるものがあるのは、項目分類上当然のことではあるが、回答カテゴリの分類上、有用な示唆を与えてくれる)。

これと同様に、ハワイ日系人調査の結果の方が回答比率の高いカテゴリでは、日本に関連の薄い層ほど(表では(非) > (日)と示す)、その回答カテゴリを支持する率が高い(有意差の向きは(非) > (日))傾向がみられる。この両方の傾向は、われわれの予期したこととく違うものではない。すなわち、全体を通してみると積極的にプラスの関係が数多く存在するという状況ではなくて、われわれの予想にとってマイナスのデータは出ていないという消極的な関連の状況であるといえるだろう。

すでに、全体的にみた回答分布の比較から判断すると、これまでの意味における伝統的な回答カテゴリの比率は、ハワイの方が日本より高いものもあるが、そうでない(いわば常識的な)傾向を示すものが多い。しかし、日本、ハワイのそれぞれの項目についてその内部を性、年齢、学歴別にして、意見の差を考えると、両者それぞれの、社会内部における意見の差の有無は、必ずしも同じではなかった。これは両方の社会において、社会的な環境あるいは、個人がどの属性をもつかということによる位置づけがいくらか異なっているためでもあるだろうし、各質問項目の回答カテゴリがどのような文脈で考えられているか、ということの両方に関連していることだろう。

例えば、女性は社会的にみて男性に従うものと考えられている社会では、妻(女性)の意見はいつも夫(男性)の意見と同じであるとか、家族制度の強い社会では、一家中の人の意見のく違いは存在せず、家長の意見でいつも代表されるとか、あるいは、年齢の若いものは、年長者に従うとかいう社会では、われわれがしらべたような、個人の属性による分析は、個人の意見の差異をみるのにはほとんど役に立たないから、個人の意見を重視する社会とは基本項目と各質問項目の意見との関係が異なるものになる可能性が強いと考えられる。

日本とハワイとでは、上にのべたような社会構造上極端ともいえるような一定の傾向をもつ顕著な差は全く考えられないが、調査の結果にはいくらか、差がみられた。

また、このような社会的な背景が、たとえば、

「年齢の高いものは進歩的な意見を持つ」とか「学歴の高いものは伝統的意見を尊重する」

とかいうような社会にあっては、その社会では、「何が伝統的であるか」、「何が進歩的であるか」ということを（その社会の）人々がどのように考えているかということと、各属性別の意見の差は関係が深くなるであろう。

どの社会においても、たとえば高年齢層は「保守的な意見をもつものである」というのが一般的傾向であるとしたときも、「何が保守的か？」という判断が各社会に属する人によってそれぞれ異なれば、年齢別にみたときの調査結果はそれぞれの社会において異なってくるだろう。従ってこの場合、「何が伝統的か」又は「何が保守的か」ということが分らなければ具合が悪いが、通常は、調査の結果から、直接このようなことが出てくるのではなく、逆に、調査の結果高年齢層ほど支持する率が高いからこの意見は保守的な意見（又は伝統的な意見）だろうと推測することになる。すなわち、われわれの主観的な判断でこのような対応関係をきめているわけであるといえる。しかし、これだけでは、結果を記述するとき、説得力に欠けている。

このような事情は、われわれが日本との関連の強さをみるため二、三の基礎的項目をとり上げて分析してみたところでも同じである。ハワイの日系人のうち、日本との関連が強い層ほど「日本的と思われる意見」に対する回答率が高いというわけでもない、という結果が得られたが、これは前提条件として、たとえば、日本語が出来る人ほど日本と関連が強いと単純に考えることが具合が悪いのか、あるいは、ある意見について「この意見は日本的（伝統的）である」と考えることが独断であるのか、あるいはこの両方か、あるいは、日本の伝統的な意見の失なわれていく過程がこのように一斉に何らかの減少傾向を示すという単純なものではないか？あるいは、何か他に考えるべきことがあるのか。むずかしい問題である。恐らくこの点は、「人々のものの考え方」が他の社会あるいは他の文化に属する人達との接触により、もし変るとすれば、変っていくとき、どのような経過をたどって変っていくか、という問題とかかわり合いのあるところであろう。次節以下ですこしこれらの問題に関する点をしらべてみよう。

§5 各個人の日常生活の類似性とその人の“ものの考え方”の関連

…ハワイ調査の実態項目の回答結果を用いた各個人の類別と意見の関連…

（質問項目の類別の妥当性）

これまでの分析は、日本とハワイとの調査結果の表面的な異同に関するいくつかの面をとり上げて、比較検討することを目的としていた。その際、少しばかり見通しをよくするため、過去における日本の調査結果を利用して回答カテゴリを伝統的⇔非伝統的と分類した上で分析をおこない日本およびハワイの調査結果の比較をおこなった。

このとき、ハワイ日系人の世代別、宗派別、言語能力別にみた意見の開きは、前節でのべたようにわれわれの予想とは喰い違わないとはいっても、積極的にはっきりとした結論が得られるという状況ではなかった。しかし、これは、ハワイ日系人の各方面にわたる属性のうち、1つ1つを切り離してとり上げているために関連がはっきり出てこなかったということも考えられる。したがって、個人の日常生活に関する多くの面を同時にとり上げて、全体を総合して、日本との関連の強い層とそうでない層とを類別することが可能であれば、そのうちのグループ別にみた意見の差は、はっきりした傾向（日本との関連の強いグループほど‘伝統的’意見を支持するというような）を示す可能性も高くなると考えられる。

今度は、ハワイの調査結果のうち、実態に関する部分の資料を利用して、各個人を類別し、そのような類別がその人の“ものの考え方（回答）”とどのように関連しているかをみよう。

1. 分析の手順

分析の主要な点を結論的に書きしるすと次のいくつかの部分にわけられる。

- 1) まず各個人の属性、日常生活のパターンにより、各個人を類別する（パターン分類の手法を用いる）。すなわち、似たような日常生活をしている人は、似たように位置づけられるように各個人の類別をする。

（どのような属性や日常生活のパターンをとり上げるか、その結果はどうかは次節での

べる)

- 2) パターン分類の結果、各属性および日常生活パターンのそれぞれにスコアが与えられ、さらに各個人にスコアが与えられることになる(各個人にはその属性、日常生活のパターンに応じて、平均点として個人のスコアが与えられる)が、このスコアの意味を検討した結果、個人の類別にもっとも有効なものは、日常生活における日本との関連の度合いということが分った。
- 3) このようなスコアをもつ各人が、それぞれの質問項目において、どの回答カテゴリに回答したかをしらべ、各々の回答カテゴリに回答した人のスコアの平均点を、その回答カテゴリに与える点数とする。
- 4) このようにして、各回答カテゴリに与えられた点数は、2) で考えられた意味づけにより解釈される。また、各回答カテゴリをこの点数によって、一定の方式で分類する。(分類の仕方は後にのべる)
- 5) この分類と、前節までにのべてきた回答カテゴリの分類(伝統的↔非伝統的)とはほぼ一致する。
すなわち、日本の調査結果を用いておこなったカテゴリの分類と、全然関係なく独立におこなったハワイの調査結果を用いたカテゴリの分類とが大略一致することが分った。
- 6) 各回答カテゴリに与えられた点数はその回答カテゴリの日本的な度合いを示す尺度と考えることが出来る。

この数値と、§ 3.3 でのべた、日本およびハワイ両調査の差を示す指標の数値とをくらべると、'日本の意見'と考えられるものは'日本的な度合い'が高いという関係が得られる。5), 6) の結果をあわせて考えれば、日本人の'ものの考え方'とハワイ日系人の'ものの考え方'との関連がかなりはっきりして来たといえる。

2. 各個人の属性と日常生活のパターンによる個人の類別

(パターン分類の方法に基づく個人の類別と日常生活パターンの数量化)

同じような属性をもつ個人、同じような日常生活のパターンをもつ個人は、何らかの意味で共通性があるだろう。この共通性を目にみえる形でとり出す方法がパターン分類の方法* といえる。すなわち、同じような属性、日常生活パターンをもっている人同志は、同じような点数が与えられるように、一方、異なるパターンを示すほど与えられる点数が異なるように、点数を与えるパターン分類の方法は、分類に用いる変数として、個人の属性や日常生活のパターンをとりあげ、個人をパターンの類似性を基準として類別しようとする時有力なものである。

a) 分析にとりあげた個人の属性と日常生活パターン

- 1) 個人的属性として7項目
 - # 1.1 性 (各カテゴリに関しては、第 13 表参照)
 - # 1.2 年齢
 - H 13 学歴
 - H 8a 職業
 - H 5 世代(何世か)
 - H 4 出身(父・祖父の出身、日本における県・地方)
 - # 3.1 b 宗教
- 2) 日常生活において、日本との関連をみる主要なものとして、言語に関する4項目
 - H 16 日本語何年習ったか
 - H 17 日本語うまく使えるか
 - H 33×H 34 日本語の手紙かくか
 - H 35 暗算をどの国語でするか
- 3) マスコミ接触状況に関するもの5項目
 - H 20 日本語新聞よむか

* たとえば、情報処理と統計数理(林ほか)、産業図書 244~249 頁参照。

- H 22 日本語ラジオきくか
- H 23 KIKU-TV (日本語のテレビ) みるか
- H 31 日本の映画みるか
- H 32 日本の音楽すきか
- 4) 日常生活において、いわゆる同化といわれるものに関する分野から6項目
 - H 1 呼び名 (日本式かアメリカ式か)
 - H 14 配偶者日系か
 - H 26 家族に非日系人と結婚した人がいるか
 - H 19 団体加入
 - H 25 友達 } (日系人が多いかどうか)
 - H 27 仕事仲間

以上のような 22 項目をとりあげて、パターン分類の方法により各個人および、各項目の各回答カテゴリに数値を与えた。

その数値を第 2 根まで、すなわち ${}^1X, {}^2X$ まで示す (第 13 表)。各回答カテゴリは $({}^1X, {}^2X)$ の数値に応じて平面上の点となって示される (第 4 図)。なお、この分類の効率を示す固有値の大きさは

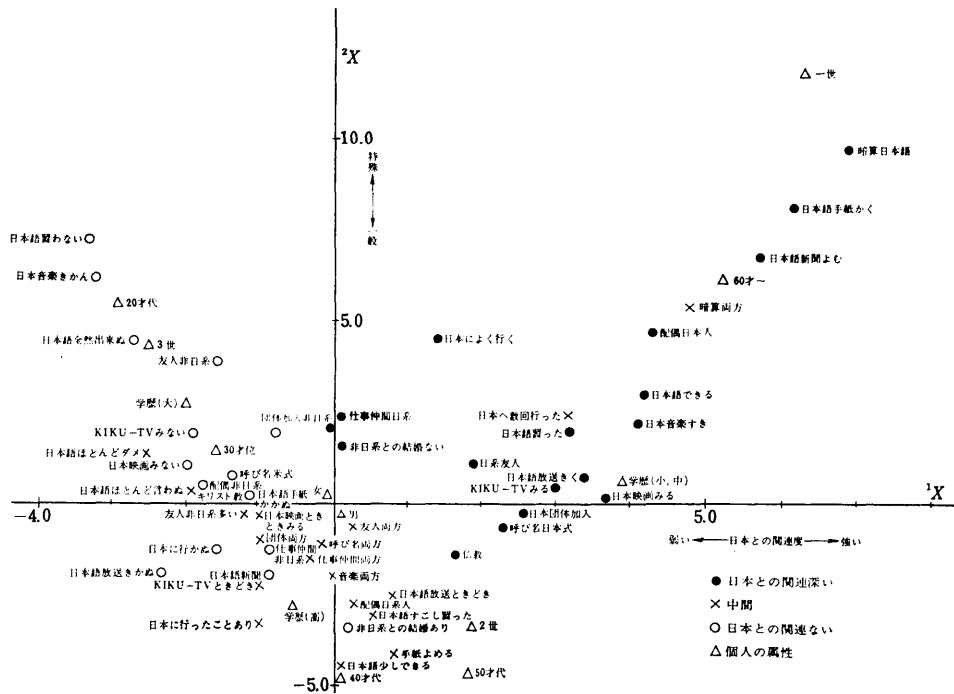
最大 latent 根 $\eta_1^2 = 0.3068$

第 2 latent 根 $\eta_2^2 = 0.1465$

で第 3 根 (=0.09) 以下の値は小さくなる。

第 4 図からみると、第 1 軸の (+) から (-) の方へかけて、日本との関連の強いものから弱いもの、関連のないものへと並んでいる。

第 2 軸は、その生活パターンがハワイの日系人社会で特殊なものか、一般的なものかを表わしているとみられる。したがって、ここで問題にしている属性や日常生活のパターンから、各個人の日本らしさの度合をみようという場合には、第 1 軸に与えられた数値に着目すればよい。



第 4 図 各カテゴリのパターン分類による配置図 (${}^1X, {}^2X$)
(各カテゴリの親近性の表現)

第13表 個人の属性および日常生活パターンに与えられた数値
 (パターン分類により各カテゴリに与えられた数値, 第2根に対する数値まで)

| 問番号 | 見出し | カテゴリ | 1X | 2X | サンプル数 | |
|-------|------------|-------------|----------|----------|-------|---|
| # 1.1 | 性別 | 1. 男 | 0.04046 | -0.00386 | 245 | △ |
| | | 2. 女 | -0.03510 | 0.13874 | 218 | △ |
| H 1 | 呼び名 | 1. 日本 | 2.30263 | -0.61682 | 154 | ● |
| | | 2. アメリカ | -1.37096 | 0.73040 | 253 | ○ |
| | | 3. 両方 | -0.17085 | -1.07794 | 55 | × |
| H 4 | 出身 | 1. 広島 | 0.16495 | -0.15687 | 122 | |
| | | 2. 山口 | 0.37344 | 1.60828 | 109 | |
| | | 3. 九州 | 0.21458 | -3.83469 | 84 | |
| | | 4. 沖縄 | 0.36541 | -0.55359 | 64 | |
| | | 5. 本州 | -0.18949 | -0.13747 | 58 | |
| H 5 | 世代 | 1. 一世 | 6.25839 | 12.41843 | 22 | △ |
| | | 2. 二世 | 1.07552 | -3.27803 | 282 | △ |
| | | 3. 三世 | -2.75925 | 4.27989 | 159 | △ |
| # 1.2 | 生まれ年 | 1. 20歳代 | -2.96230 | 5.72024 | 120 | △ |
| | | 2. 30歳代 | -1.76709 | 1.47442 | 63 | △ |
| | | 3. 40歳代 | 1.14242 | -4.89424 | 125 | △ |
| | | 4. 50歳代 | 1.83389 | -4.57627 | 97 | △ |
| | | 5. 60歳以上 | 5.21319 | 6.17982 | 52 | △ |
| H 8 a | 職業 | 1. 専門, 管理 | -0.95883 | 0.20297 | 106 | |
| | | 2. 熟練 | 0.77542 | -2.07830 | 137 | |
| | | 3. 事務 | -1.32212 | -1.75821 | 113 | |
| | | 4. 無職, 主婦 | 1.37442 | 4.59058 | 107 | |
| H 10 | 日本へ行ったか | 1. 行ったことない | -1.49814 | 0.63626 | 251 | ○ |
| | | 2. 1度だけ | 0.80344 | -2.87991 | 122 | × |
| | | 3. 2~5回 | 3.17470 | 2.42954 | 79 | × |
| | | 4. 6回以上 | 1.37442 | 4.59058 | 10 | ● |
| H 13 | 学歴 | 1. 小・中学校 | 3.93332 | 0.72541 | 101 | △ |
| | | 2. 高校 | -0.39943 | -2.29594 | 205 | △ |
| | | 3. 大学 | -1.99441 | 2.71783 | 157 | △ |
| H 14 | 配偶者日系か | 1. 一世 | 4.31958 | 4.75480 | 43 | ● |
| | | 2. 二世, 三世 | 0.28399 | -2.50686 | 303 | × |
| | | 3. 非日系 | -1.72059 | 0.59154 | 20 | ○ |
| H 16 | 日本語何年習ったか | 1. 全然習わない | -3.28301 | 7.11332 | 59 | ○ |
| | | 2. 1~5年 | -1.85755 | 0.53667 | 111 | × |
| | | 3. 6~10年 | 0.61650 | -3.13319 | 201 | × |
| | | 4. 10年以上 | 3.16430 | 1.89392 | 90 | ● |
| H 17 | 日本語うまく使えるか | 1. よくできる | 4.18915 | 2.96180 | 103 | ● |
| | | 2. まあできる | 0.10389 | -4.43085 | 181 | × |
| | | 3. ほとんどできない | -2.28756 | 1.47968 | 89 | × |
| | | 4. 全然ダメ | -2.73616 | 4.39835 | 89 | ○ |
| H 19 | 団体加入 | 1. 日系 | 2.57185 | -0.22532 | 115 | ● |
| | | 2. 両方 | -0.92800 | -0.39616 | 198 | × |
| | | 3. 非日系 | -0.81581 | 1.93802 | 11 | ○ |
| H 20 | 日本語新聞 | 1. 読まない | -0.74269 | -0.84440 | 409 | ○ |
| | | 2. 読む | 5.66713 | 6.93829 | 54 | ● |

第13表 つづき

| 問番号 | 見出し | カテゴリー | ¹ X | ² X | サンプル数 | |
|-------------------|---------|------------|----------------|----------------|-------|---|
| H 22 | 日本語放送 | 1. きかない | -1.89488 | 0.94204 | 226 | ○ |
| | | 2. 時々 | 0.73094 | -1.81708 | 139 | × |
| | | 3. きく | 3.40125 | 0.81255 | 97 | ● |
| H 23 | KIKU-TV | 1. みない | -1.89800 | 1.94725 | 97 | ○ |
| | | 2. 時々 | -0.80740 | -0.95207 | 241 | × |
| | | 3. みる | 3.04063 | 0.46648 | 123 | ● |
| H 25 | 友達 | 1. 日系 | 1.94212 | 1.17113 | 92 | ● |
| | | 2. 日系及日系混血 | 0.21462 | -0.51111 | 188 | × |
| | | 3. 両方 | -1.15263 | -0.22312 | 169 | × |
| | | 4. 非日系 | -1.56926 | 3.95368 | 14 | ○ |
| H 26 | 非日系との結婚 | 1. なし | 0.08933 | 1.61153 | 286 | ● |
| | | 2. 1人 | -0.29868 | -2.00316 | 125 | × |
| | | 3. 2人以上 | 0.17462 | -3.63172 | 51 | ○ |
| H 27 | 仕事仲間 | 1. 日系 | 0.08977 | 2.42896 | 34 | ● |
| | | 2. 日系多い | -0.28988 | -1.26834 | 82 | × |
| | | 3. 両方 | -0.84390 | -1.13586 | 178 | × |
| | | 4. 非日系 | -0.66257 | -0.93524 | 60 | ○ |
| H 31 | 日本の映画 | 1. みる | 3.71815 | 0.07715 | 61 | ● |
| | | 2. 両方 | -0.85109 | -0.13999 | 267 | × |
| | | 3. みない | -1.97903 | 1.10151 | 49 | ○ |
| H 32 | 日本の音楽 | 1. 好き | 4.06003 | 2.29618 | 54 | ● |
| | | 2. 両方 | -0.04817 | -1.55498 | 341 | × |
| | | 3. 好きでない | -3.22772 | 6.19521 | 64 | ○ |
| H 33 × H 34 | 日本語手紙 | 1. 日本語 | 6.23775 | 8.17592 | 46 | ● |
| | | 2. 両方 | 0.81424 | -4.17870 | 93 | × |
| | | 3. 英語 | -1.29475 | 0.04480 | 313 | ○ |
| H 35 | 暗算 | 1. 英語 | -0.60231 | -0.75332 | 422 | ○ |
| | | 2. 日本語 | 6.94448 | 9.83630 | 28 | ● |
| | | 3. 両方 | 4.76903 | 5.52249 | 13 | × |
| # 3.1 B | 宗教 | 1. 仏教 | 1.57401 | -1.43799 | 182 | ● |
| | | 2. キリスト教 | -1.32685 | 0.05869 | 124 | ○ |
| | | 3. 他 | 2.37390 | 1.17879 | 26 | × |

注) 合計は463である。その他, DK, 無答は除いてあるので463にならないものもある。

このように、個人の属性および日常生活パターンの類似性からみると、最も類似性に寄与する要因が、日本との関連性の強さになり、2番目が日常生活の一般性の度合いということになるのは興味のあるところである。

もちろん、日常生活パターンとして「日本との関連」を主に考えるような項目ばかりをとり上げていることもこのようになった原因であろうが、それを考えに入れても、この日本との関連の強さが予期されたように最も強い要因となるというところにハワイの日系人の生活を考える上で重要な点があると考えられる。すなわち、日本との関連の度合いというものを抜きにしては、考えられない面があるということである。

b) 各属性、各カテゴリーに与えられた数値

第1軸に与えられた数値¹Xをみると、各項目の各カテゴリーの数値はプラス側が日本的、マイナス側がそうでないというようになるが、その数値の開き具合によって、その項目を個人の分類に用いるときの相対的な効率のよさが判断できる。

個人的属性では ‘年齢’, ‘世代’
言語関係では ‘暗算’ が1番で, 次が ‘日本語の手紙を書く’, その次は ‘日本語を話す’
となり

マスコミ関係では, ‘日本の音楽を好む’ が1番で, 以下は ‘日本語の新聞をよむ’, ‘映画をみる’, ‘ラジオを聞く’, ‘テレビをみる’ という順になる. 上の言葉の順とあわせて考えると, ほぼ日常の言語上の難易の感じと同じような順になる.

すなわち, 多くの人が共通に親しみやすいものは, 分離(類)の効率が悪くなり, 親しみ難いものは, 特殊になるから分離の効率からみるとかえってよいということで, 常識的な結果である. また, 同化に関連する項目では, 各個人が主体的選択の出来るものほど分離の効率がよくなるといえる. すなわち, ハワイ日系人の場合は世代, 日本語能力等で日常生活のパターンが相対的に(大きく)異なるものと考えられるが, 職業や仕事仲間にくらべ, 同化の諸項目での差異は友達, 団体加入の面で相対的に大きいものとみられる.

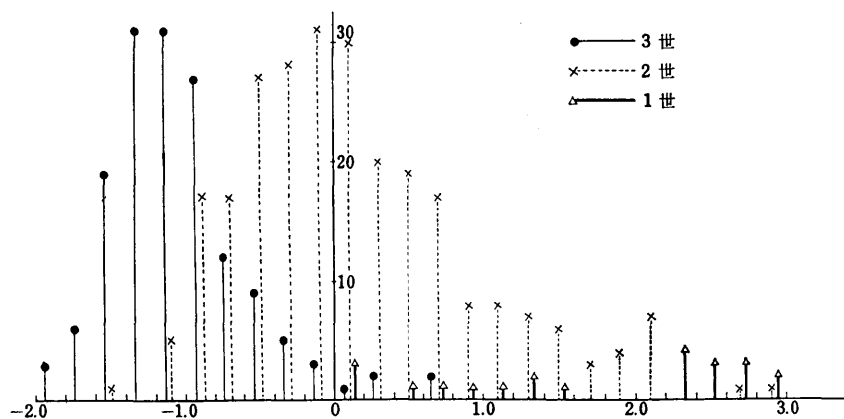
第14表 属性別にみた数値の平均

| | カテゴリー | \bar{x}_1 | \bar{x}_2 |
|-----|-------------|-------------|-------------|
| 性別 | 1. 男 | 0.01091 | -0.00983 |
| | 2. 女 | -0.01226 | 0.01105 |
| 世代別 | 1. 一世 | 1.91848 | 1.80975 |
| | 2. 二世 | 0.35390 | -0.53412 |
| | 3. 三世 | -0.83912 | 0.61507 |
| | 4. 四世 | -1.13634 | 1.07494 |
| | 5. 両親が一世と二世 | -0.16519 | -0.11634 |
| | 6. “二世と三世 | -0.89503 | 0.25723 |
| | 7. 帰米 | 1.76791 | 0.60379 |
| 年齢別 | 1. 20歳~24歳 | -0.92862 | 1.02502 |
| | 2. 25歳~29歳 | -0.88464 | 0.55364 |
| | 3. 30歳~34歳 | -0.59965 | 0.39234 |
| | 4. 35歳~39歳 | -0.47793 | -0.01094 |
| | 5. 40歳~44歳 | -0.14526 | -0.78027 |
| | 6. 45歳~49歳 | 0.25187 | -0.66565 |
| | 7. 50歳~54歳 | 0.50161 | -0.69691 |
| | 8. 55歳~59歳 | 0.62440 | -0.66116 |
| | 9. 60歳~ | 1.59783 | 0.89594 |
| 学歴 | 1. 小学校・学歴なし | 1.53606 | 0.55749 |
| | 2. 中学校 | 1.08446 | -0.07103 |
| | 3. 高等学校 | -0.09360 | -0.39159 |
| | 4. 実業学校 | -0.21359 | -0.21017 |
| | 5. 短大・大学 | -0.61439 | 0.41789 |
| | 6. その他 | -0.60897 | 0.26578 |

c) 各個人に与えられた得点と個人のグループ分け

各個人の得点は, その人の属性および日常生活の選択のパターンにより, それぞれの人が選択したカテゴリーの数値の平均として与えられる. したがって, 似たような日常生活のパターンをもつ人同志は同じような数値が与えられ, たとえば, 日本語のよく出来る人で, 日本関係のマスコミに接触する度合いが高ければ, プラスの高い数値が与えられるようになる. 一般に日本と関連の強い人ほどプラスの高い数値が与えられ, そうでない人ほどマイナスの数値になるといえる.

各個人をその属性別にして、各個人に与えられた数値の属性別の平均値を算出してみると、第14表のようになり、各属性における各カテゴリの親近度は、ほぼ常識通りの結果になる。また、これを各人がどの見当の数値を得ているか、世代別を例にとり図示してみると第5図のようになる。ほぼ世代が下るにつれて日本との関連の度合いがうすくなっていく様子がみられるのも常識的なところであるといえよう。



第5図 属性と日常生活パターンによる個人の得点分布の例示
(パターン分類の手法による)

3. 各質問の回答カテゴリの分類

つぎにこのように与えられた各個人の得点を用いて、各質問項目の各回答カテゴリを分類することを考えてみよう。

a) 各回答カテゴリに与える点数

前節の分析により、各個人に与えられた数値は、その人の日本との関連の度合いを示すものと考えられ、プラスの値が高ければ高いほど、その人は日本との関連が強いと判断できると考えられた。

このような数値が与えられている各個人が各質問項目のそれぞれについて、どの回答カテゴリに回答したかを調べ、それぞれ各々の回答カテゴリについて、そのカテゴリに回答した人に与えられている数値、の平均点を算出して、この値を、その回答カテゴリの点数とする。

各回答カテゴリに与えた数値(平均値)およびその回答カテゴリを選択した人のもっている数値の分散の値を第15表に示してある。

各回答カテゴリを選択した人がプラスやマイナスの数値をもつ割合やその大きさに応じて、各回答カテゴリに数値が与えられるが、この数値は、その回答カテゴリの相対的な“日本らしさ”の平均的表現とみなされる。というのは、各個人は、各質問項目のそれぞれについて、その回答カテゴリのうちどれか1つを選択しているわけである(同一質問項目では2つ選択することは出来ない)から、たとえば二項選択の場合は一方の回答カテゴリにプラスの数値が与えられ、他方にはマイナスの数値が与えられ*、それぞれの回答カテゴリを選択する人が前者はプラスの人の割合が多くなるほど、後者はマイナスの人の割合が多くなるほど、回答カテゴリに与えられる数値の差がひらき、前者は相対的にプラスの大きな値になり、後者はマイナスの大きな値になる。

すなわち日本と関連の度合いの高い人が選択する頻度の高いカテゴリほどプラスの値が大きくなる。

この意味で、相対的にみた“日本らしさ”の平均的表現と考えたのである。

* 各人に与えられた数値は全体を平均すると0になる。

第15表 各回答カテゴリに与えられた点数(平均点)と分散

回答カテゴリの分類

| 問番号 # | 質問見出し | 回答カテゴリ | \bar{x}_i | σ_i^2 | ハワイバ ターン分 類による | 日本回 帰分析 による |
|----------|------------|--|--|--|----------------------|-------------------|
| 2.1 | しきたり | 1. おし通せ 2. 従え | -0.11412 0.51028 | 0.76446 1.27292 | ○ ● | ○ ● |
| 2.2 | 反対をおしきって実行 | 1. 実行 2. とりやめ | -0.24495 0.11200 | 0.83140 0.89196 | ○ ● | ○ ● |
| 2.4 | くらし方 | 1. 金持ち 3. 趣味にあった 4. のんきに 5. 清く正しく | -0.06442 -0.29266 0.13412 0.56232 | 0.77682 0.78601 0.99026 1.33070 | △ ○ △ ● | △ ○ △ ● |
| 2.5 | 自然と人間の関係 | 1. 従う 2. 利用 3. 征服 | 0.16301 -0.16426 0.84922 | 1.35805 0.69967 1.57453 | ● ○ ● | ● ○ ○ |
| 4.4 | 先生悪事 | 1. そんなことはないという 2. ほんとうだという | 0.62895 -0.09533 | 1.23915 0.93376 | ● ○ | ● ○ |
| 4.5 | 金は大切か | 1. 賛成 2. 反対 | 0.88929 -0.15694 | 1.34887 0.77626 | ● ○ | △ ○ |
| 4.8 | 結婚式・葬式 | 1. よくない 3. 身分相応に | 0.27384 -0.08529 | 1.64050 0.85138 | ● ○ | △ △ |
| 4.10 | 養子 | 1. つがせる 2. つがせない | -0.09706 0.17590 | 0.87100 1.19617 | ○ ● | ● ○ |
| 5.1 | 恩人キトク | 1. 故郷へ帰る 2. 会議に出る | -0.00955 0.03535 | 1.08664 1.02894 | △ △ | ● ● |
| 5.1b | 親キトク | 1. 故郷へ帰る 2. 会議に出る | -0.04297 0.09448 | 0.95197 1.12518 | △ △ | △ △ |
| 5.1c | 入社試験(親戚) | 1. 1番の人 2. 親戚 | 0.09397 -0.24889 | 1.07224 0.77678 | ● ○ | (●) (○) |
| | " (恩人の子) | 1. 1番の人 2. 恩人の子 | 0.03424 -0.03846 | 1.05342 0.95549 | △ △ | … … |
| 5.1d | 大切な道徳 | 親孝行 あげた あげない | 0.23853 -0.29244 | 1.13395 0.68049 | ● ○ | (●) (○) |
| | | 恩返し あげた あげない | 0.48580 -0.20842 | 1.36333 0.69944 | ● ○ | (●) (○) |
| | | 権利の尊重 あげた あげない | -0.28914 0.47149 | 0.65997 1.19584 | ○ ● | (○) (●) |
| | | 自由の尊重 あげた あげない | -0.19349 0.18134 | 0.70871 1.20502 | ○ ● | (○) (●) |
| 5.6 | めんどろみる課長 | 1. めんどろをみない 2. めんどろをみる | -0.09497 0.04938 | 0.74843 1.12181 | △ △ | (○)△ (●)△ |
| 5.16 | 借用書 | 1. 不愉快 2. 当然 | -0.29219 0.19456 | 0.73083 1.08017 | ○ ● | (○) (●) |
| 7.4 | 個人と幸福 | 1. 個人→国 2. 国→個人 3. 国=個人 | -0.07676 0.13784 -0.00579 | 1.12457 0.93036 0.93926 | △ △ △ | ○ ● ○ |

第15表 つぎ

| 問番号 | 質問見出し | 回答カテゴリ | \bar{x}_1 | σ_1^2 | ハワイパターン分類による | 日本回帰分析による |
|-------|-----------|-----------------------------------|---------------------------------|-------------------------------|--------------|--------------|
| 7.6 | 勲章か、賞金か | 1. 勲章 2. 賞金 | -0.01090 -0.11532 | 0.94757 1.04701 | △ △ | ○ △ |
| 7.7 | 仕事の価値 | 1. 実際の仕事 2. 学者や芸術家 3. 同じ | -0.11465 0.06648 -0.05724 | 0.82340 1.03077 0.95973 | △ △ △ | △ △ △ |
| 8.1 | 政治家にまかせるか | 1. 賛成(まかせる) 3. 反対 | 0.55689 -0.12226 | 1.26361 0.92408 | ● ○ | ● ○ |
| 8.3 b | 専門の研究と政治 | 1. 専門の研究 2. 政治性必要 3. 積極的に参加 | 0.28919 -0.11472 -0.12171 | 1.15038 0.84114 0.97002 | ● ○ ○ | ● ○ △ |
| 9.3 | 日本の庭、西洋の庭 | 1. 日本の庭 2. 西洋の庭 | 0.02968 -0.26829 | 1.05702 0.78868 | △ △ | (●)△ (○)△ |

表中 () のついで分類は多数意見に基づくものおよび大切な道徳

b) 回答カテゴリの分類

上述のような意味に解釈される数値が、各回答カテゴリに与えられたので、この数値を用いて、各回答カテゴリを“日本らしさ”の度合いに応じて分類してみよう。

分類の基準として考えられるのはつぎの2つである。

第1の分類法： 一定の数値以上を得たカテゴリを“日本的”なカテゴリとし、一定の数値以下を“非日本的”なカテゴリとする。中間の数値を得たカテゴリを中間の分類に入れる。

第2の分類法： 各質問項目の対立する各カテゴリの数値について、与えられた数値は平均値であるから、平均値の差の検定をし、有意差のあるときは(+)の方を“日本的”カテゴリとし、(-)の方を“非日本的”カテゴリとする。有意差のない場合はこの質問項目のカテゴリはすべて中間のカテゴリとする。

第1の分類はもっと単純に、プラスの数値を得たカテゴリは上述のことから幾分でも日本の色彩が勝るから“日本的”とし、マイナスの数値を得たカテゴリは“非日本的”とすることも出来る。

ここでは、多少分類が直観的ではないが、第2の分類法により各カテゴリを分類しよう。

第16表 日本の調査データによる分類とハワイ日系人調査データによる分類の比較
回帰分析に基づくカテゴリの分類

| ハワイのデータによる分類 | 非伝統的 ○ | 伝統的 ● | 中間 △ | 計 |
|-------------------|--------|--------|------|---------|
| 回答カテゴリに与えた数値による分類 | | | | |
| 非日本的 ○ | 8+(4) | 1* | 2 | 11+(4) |
| 日本的 ● | 2* | 7+(4) | 2 | 11+(4) |
| 中間 △ | 4+(2) | 2+(2) | 8 | 14+(4) |
| 計 | 14+(6) | 10+(6) | 12 | 36+(12) |

注：表中の () 内は # 5.1 d “大切な道徳” および多数意見：# 5.1 c-1 ‘入社試験’ (シンセキ), # 5.6 “めんどろみる課長”, # 5.16 ‘借用書’, # 9.3 ‘日本の庭、西洋の庭’

| 分類の結果は | 表の記号 |
|--------|------|
| “日本的” | ● |
| 中間 | △ |
| “非日本的” | ○ |

として第 15 表の右欄に記入してある。

c) これまでの分類との比較

これを、これまで利用してきた日本の調査結果による回帰分析に基づき分類と対比して見ると第 16 表のようになる。

分類がくいちがうもの（表中では * で示す）はこれまでも何ヶ所かで指摘してきた。

4.10 ‘養子につがせるか’の‘つがせる’（日本の分類では‘伝統的’に入るが今の分類では‘非日本的’に入る）

4.10 ‘つがせない’（上と逆に日本の分類では‘非伝統的’に入るがこの分類では‘日本的’に入る）

2.5 ‘自然と人間との関係’の‘自然を征服’（上に同じ）

の 3 カテゴリーである。

第 17 表 回帰分析に基づきカテゴリーの分類との比較 (2)

| 回答カテゴリーの数値 | 非伝統的 ○ | 伝統的 ● | 中間 △ | 計 |
|------------|--------|--------|------|---------|
| - | 11+(6) | 2 | 7 | 20+(6) |
| + | 3 | 8+(6) | 5 | 16+(6) |
| 計 | 14+(6) | 10+(6) | 12 | 36+(12) |

注：分類のあわぬもの # 2.5 ‘自然と人間との関係’の‘自然を征服’

4.10 ‘養子につがせるか’の‘つがせる’および‘つがせない’

5.1 ‘恩人のキトク’の‘故郷に帰る’および‘会議に出席’

また参考までに回答カテゴリーに与えた数値の符号（の+と-）による分類との関係を示すと第 17 表のようになる。上にのべた第 2 の分類により、中間に分類された回答カテゴリーのうち # 5.1 ‘恩人のキトク’の‘故郷に帰る’および‘会議に出る’が日本の分類と対比したとき、((+)→伝統的, (-)→非伝統的という関連からみて) 符号がうまく合わない他はすべて伝統的→(+), 非伝統的→(-)という対応が見つかる。

この両方をあわせて考えると、分類のくい違いはそれ程大きくない（48 カテゴリー中、5 カテゴリー、ほぼ 10% 強）と考えられる*。

4. “各回答カテゴリーに与えられた数値”と“日本およびハワイ両調査における比率の差”の関係

前節では、各回答カテゴリーに与えられた数値に基づいて回答カテゴリーを日本のカテゴリー、および非日本のカテゴリーと分類し、この分類が日本における調査結果を用いた分類 (§ 3.2 の 3 項) とかなりよく対応することをみた。

各回答カテゴリーに与えられた数値はすでにのべたように、そのカテゴリーの‘日本らしさ’の度合いを示すものと考えられるので、‘日本の意見’を探るといふ観点から、この数値がプラスの大きな値を得た回答カテゴリーをとり上げて考えてみよう。

これらはつぎのようなものである。

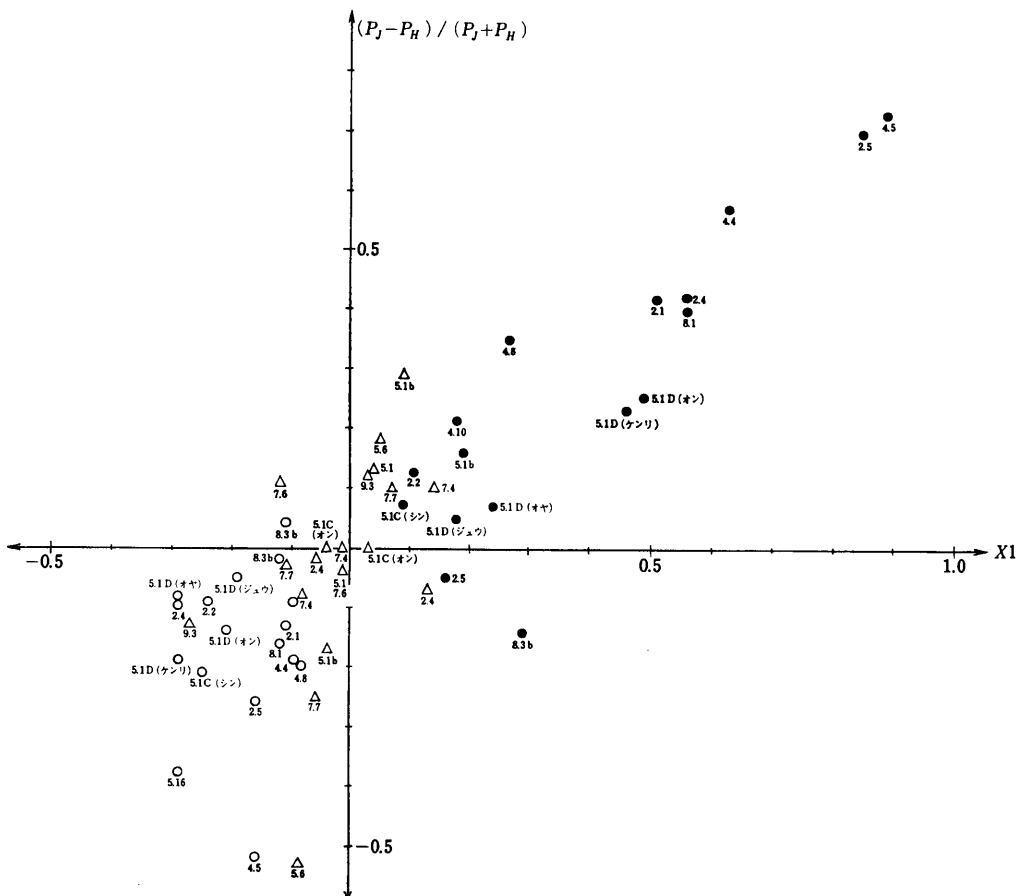
* 分類のくい違いが 3 項目（5 カテゴリー）に加えて、日本で中間と分類され、ハワイの分類では日本的、非日本的にそれぞれ分類された # 4.5 ‘金は一番大切と教える’ことに‘養成’および # 4.8 ‘結婚式、葬式盛大に’の‘よくない’および‘身分相応に’等は今後の分析の指針を示す貴重な例外と考えられる。すなわち、これらの情報が、今後おこなわれるであろう調査企画および調査分析上、大いに役立つものと考えられる。

第18表 ハワイから見た‘日本の意見’

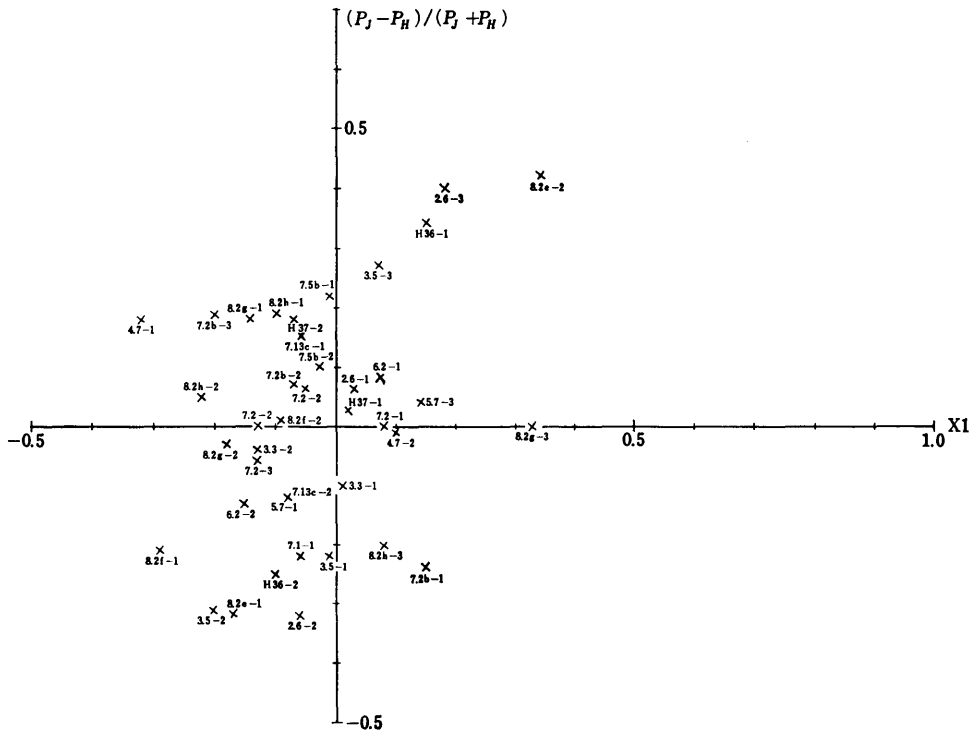
| ＃ | 項 目 | カ テ ゴ リ | 数 値 |
|-------|---------------|--------------|-------|
| 4.5 | 子供に「金は大切」と教える | 賛 成 | 0.889 |
| 2.5 | 自然と人間との関係 | 自然を征服 | 0.849 |
| 4.4 | 先生が悪いことをした | そんなことはないという | 0.629 |
| 2.4 | くらし方 | 清く正しく・くらす | 0.562 |
| 8.1 | 政治家にまかせるか | 賛 成 | 0.557 |
| 2.1 | しきたりに従うか | 従 う | 0.510 |
| 5.1 d | 大切な道徳 | 「恩返し」をあげる | 0.486 |
| 5.1 d | 大切な道徳 | 「権利の尊重」をあげない | 0.471 |
| 8.2 e | 民主主義よいか | 時と場合 | 0.340 |

これを §3.3 両調査結果の差の相対的な大きさのところで示した日本の意見（第4表）とくらべると、かなりよく一致していることが分る。

第4表に‘日本の意見’としてあげられた各回答カテゴリは、日本の調査結果の回答比率にくらべハワイ調査における回答比率が相対的に低く、 $(P_J - P_H) / P_J$ あるいは $(P_J - P_H) / (P_J + P_H)$ の値が大きくプラスの数値を得た回答カテゴリであった。この値が大きくなったのは、日本の調査結果にくらべハワイ調査でこれらの意見を支持する人がごく少数であったためであるが、第18表によればこれらの少数の人々の中には、§5.2 で考えた日常生活のパターンからみ



第6図 “回答カテゴリに与えられた数値”と“標準化した比率の差”の関係 (1)
 (日本の(伝統的)↔非日本の(非伝統的)という対の意見をもつ質問項目について)



第7図 “回答カテゴリに与えられた数値”と“標準化した比率の差”の関係(2)
(第6図以外の対立カテゴリを含まない質問項目について)

て、‘日本の度合い’の濃い人々が相対的に多く含まれていることが分る。したがって、これらの意見はハワイの調査結果から考えて日本的な生活様式の度合いの濃い人達から支持される割合が高いという意味で“日本の意見”ということが出来るばかりでなく、ハワイでは数少くなってしまうのにもかかわらず日本ではハワイにくらべ相対的に多くの人達から支持されているという意味あいでも“日本的なものの考え方”の特徴の一端を示している意見ということが出来るであろう(＃4.5 ‘子供に「金は大切」と教える’ことに‘賛成’および＃8.2e ‘民主主義よいか’で‘時と場合’という意見を除き、他の意見は日本でも相対的に少数意見になっている)

つぎに、この各回答カテゴリに与えられた‘日本らしさ’の度合いを示す数値のプラス、マイナスが日本の調査結果の回答比率とハワイ調査結果の回答比率の大小とそれぞれどのような関係にあるかを考えてみよう。すでに前項で考えたように、各回答カテゴリの‘日本らしさ’の度合いを示す数値は、§3.2の3項における伝統的対非伝統的分類とかなりよく対応していたわけであるが、この数値のプラス、マイナスが両調査の比率の大小とも或る条件の下では、かなりよく対応していることが分る。

この場合、対応関係は

| | |
|----------------|-------------|
| ‘日本らしさ’の度合いの数値 | $P_J - P_H$ |
| プラス | プラス |
| マイナス | マイナス |

という形になる。とくに、このような対応関係を、これまでとり上げてきた伝統的↔非伝統的な対を含む各質問項目(§3.2の4項の第2図および、§5.3の第15表でとり上げた項目)についてみると大変よく成立していることが分る。この模様を第6図に示す。

ただし図では横軸に各回答カテゴリの‘日本らしさ’の度合いを示す数値を、縦軸には $(P_J - P_H) / (P_J + P_H)$ の値を目盛ってある。

このような関係を上記以外の質問項目の各回答カテゴリについて示すとつぎの第7図のようになり、これらの質問項目の場合には前述の対応関係はほとんど成立しないといえる。

すなわち、質問項目の内容として、日本における伝統的な‘ものの考え方’を問題にしているような質問項目についてだけ限って考えれば、ハワイ日系人の日常生活における‘日本との関連の度合い’に基づき、各回答カテゴリの‘日本らしさ’の度合いを示す数値のプラス、マイナスは両調査の比率の大小とよい対応関係を示すことが分る。各回答カテゴリに与えた数値の与え方からみて、“ハワイにおいて多少とも日本的な生活様式の度合いの濃い人達から支持される傾向の強い回答カテゴリはハワイ日系人以上に日本人が支持する傾向が強い”という、ごく当然のような結果であるが、このような形で日本の‘ものの考え方’が浮び上ってくるということは注目すべきことであろう。

すでに§4.2の第10表で示したように、各個人を日常生活における‘日本らしさ’の度合いに応じて分類し、日本的な生活様式の度合いの濃い層とそうでない層に分けて各回答カテゴリに対する支持の模様を、ただ単純に分析しても、それ程期待したような結果にはならない。しかし、前節からの分析で示したように、各個人の回答結果をいわば日常生活の日本らしさの度合いに応じた重みをつけて加え合わせてみると、はじめてわれわれ（日本人）にとって一応納得のいく結果が得られるということが出来る。

すなわち、日常生活における日本的な生活様式の度合いの濃い人達の意見を非常に過大に評価してみると日本との関連がかなりはっきり示されるということになる。これは恐らく、これらの日本の生活様式を示す少数の人達がわれわれ（日本人）とよく似た意見を持つ傾向があるためであろうと思われる。

1) 一定の分類基準をもうけて、各回答カテゴリを分類する場合、§5.3でのべた程度の分類のくい違い（10%ほど）を許容するならば、ここでわれわれがとりあげたような日本⇔非日本⇔分類の基準以外にも、とり上げることの出来る分類基準が発見できるかも知れない。しかし、それは大変むずかしいのではないかと予想される。

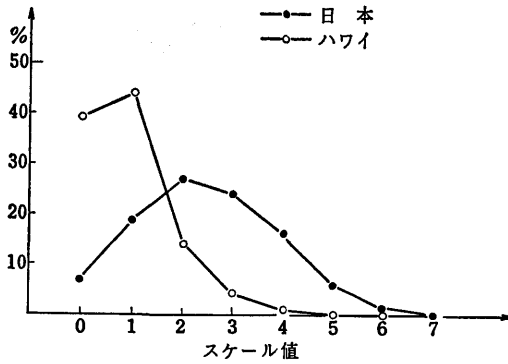
2) 日本の調査結果について、ある程度一貫した解析の柱として利用できた“伝統的”対“非伝統的”という回答カテゴリの分類および、この分類を用いるという観点から調査結果を分析するわれわれの立場は、ハワイ調査の分析に当っては、そのままの形では通用しない。

もし、強いてこのような立場をとるとすれば§5.3でのべた“日本的”対“非日本的”という回答カテゴリの分類により代表されるような観点をとるのが一つの方向といえるだろう。

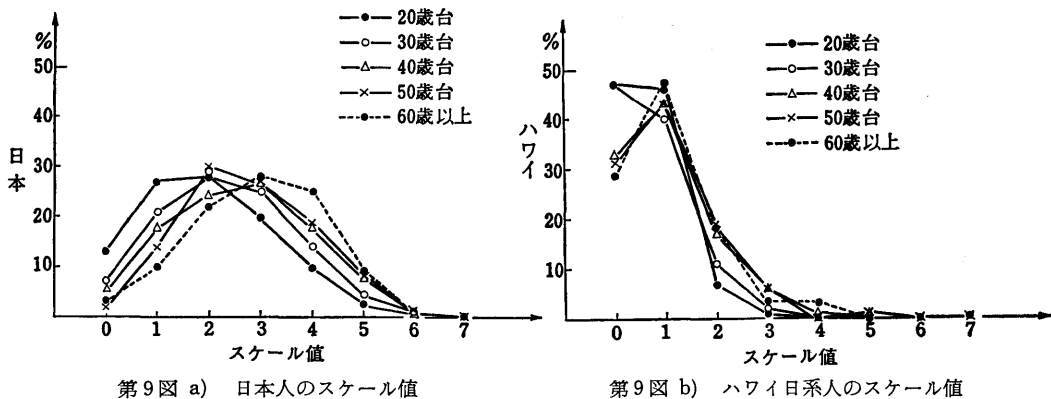
日本における“伝統的”対“非伝統的”という対立の観点が、主として“年齢”によるものであり、それに加えて“調査時期”（時勢の影響）による回答比率の増減という表面的にすぐわかるような事柄が付随していたのであるが、これにくらべて、ハワイの場合は多少ともわかりにくい面があるかも知れない。しかし、ハワイにおいては主として“日常生活において概して日本的な生活様式を残している人達の支持する意見”か“そうでない生活様式”の人達の支持する意見かの対立となり、いつてみれば“日常の生活パターンにおける日本との関連の度合い”というように考えれば、われわれにも理解が容易であるし、一般の日本人あるいはハワイの日系人にとっても、このような理解は容易であろう。すなわち、日本ではたとえば、高齢層ほど支持する意見に賛成の場合はその人の“ものの考え方”の中に“伝統的”という考え方が残っている可能性を示す指標として考えることが出来るが、これがハワイ日系人の場合には、そのような意見を示すとき、その人の生活環境には日本的な生活様式が残っている可能性をあらわす指標として考えることが出来るということになる。

このように考えのスジ道における立場を多少よみ変えることにより、日本とハワイとの関連は、より一層結びつきが明瞭になるものと考えられ、これが、文化変容の一端を示しているものと考えられるのである。

たとえば、第18表にあげた“ハワイから見た日本的意見”のうち上位7項目をとり上げてこ



第8図 日本の調査とハワイ日系人調査におけるスケール値



第9図 a) 日本人のスケール値

第9図 b) ハワイ日系人のスケール値

これらの意見をハワイの日系人がどのくらい支持しているか？ 日本の日本人がどのくらい支持しているか？ ということをも単純に数値で示すと第8図のようになる。ここでスケール値というのは、とり上げた7項目のうち、各人が回答のとき何カテゴリ選択したかという個数を示している。これらの意見は§3.3の第4表からも明らかのように日本の調査結果の方がハワイにくらべて相対的に支持率の高い意見ばかりであるから、日本のスケール値がかなり高くなっているのは当然のことであるが、この図が現在考えられる日本人とハワイ日系人との間の‘もの考え方’の差異を一番はっきりした形で示すものの一つであろうと思われる。

さらに、このスケール値を年齢別にみると日本の場合には年齢別の差異が明瞭にみられ、若い年齢層にくらべ、高年齢層は一段とこれらの意見を支持する傾向があることがはっきりわかる(第9図 a)。日本における過去20年間の調査結果あるいは社会情勢の動向からみて、この結果は当然予想されたようなものであるし、日本の中で考えれば20歳台の年齢層が一番非‘伝統的’といえる。しかし、日本の20歳台のスケール値の分布をハワイ日系人のそれと比較してみると、そこには、日本における20歳台と60歳以上の層との間の分布の開きよりも大きい差がみられる。その上、ハワイ日系人の年齢別にみたスケール値(第9図 b)は、ほとんど差がみられないこともこれまでの分析からみて予想されたことではあるが、日本人の一般のイメージからみたとき、あるいは、一般の人の予想(若い人ほど‘非伝統的’というような)からみたとき特筆すべきことの一つであろうと思われる。

3) また、ここで考えた“回答カテゴリの「日本らしさ」の度合いの数値”と“日本・ハワイ両調査における比率の差”の関係が、前述のような対応関係を示すのは、質問項目の内容からみて、われわれの常識的判断では‘伝統的’↔‘非伝統的’という対立を含む項目が多かったことも注目すべきことである。

何が日本の伝統的な‘ものの考え方’であるか？ ということは非常に重大な問題であり、それを適確に定義することは非常に困難なことであるが、若しそのような‘伝統的’な意見が見出されたとき、そのような‘伝統的意見、伝統的ものの考え方’が時勢の影響によりどのように推移していくか？、社会の中でどのような形で残り続けるか？ あるいは、他の文化的影響によりどのように変容するか？ 等のことを調査技術上の観点から予想しておくことも、同様に重大なことと考えられる。

これらのことを考え合わせたとき、この章でおこなった分析は、われわれの考えを進める上に多くの示唆を与えるものといえる。

われわれの‘ものの考え方’が伝統的なものから離れていくとともに‘新しい考え方’を受け入れていく過程には、われわれのおかれている社会の情勢が大きな影響を与えていることが予想される。しかし、‘伝統的なものの考え方’が失われていく過程と、‘新しい考え方’のとり入れられていく過程とは、前者がなくなった分だけ後者が入るというような関係ではなく、相互の関係は複雑なものであろうと考えられるので早急に判断することは出来ないが、日本人とハワイ日系人とでは、非日本的文化の受け入れ方の面からみると、量的にはもちろん大差があるといえるであろうが、質的にもかなり異なった受け入れ方をしており‘ものの考え方’の推移の方向もかなり違っていることが第6図、第7図の結果から予想される。

§6 質問相互の結びつきについて

質問項目相互の関連度（回答カテゴリの分類における内的一貫性）

これまで、質問項目の各回答カテゴリを伝統的カテゴリ、非伝統的カテゴリ、等に分類し、この分類を利用して、日本の調査結果とハワイ日系人の調査結果との比較をした。この結果、われわれの予想通りになる場合も多かったが、そうはならない場合もあった。

われわれの用いた回答カテゴリの分類が、適切なものになっていて、伝統的、非伝統的という各分類の内部で一貫性をもっているならば、日本の調査データとハワイ日系人のデータを比較した結果、われわれの予想通りにならなかったのは、日本とハワイ日系人との間では“ものの考え方”に差異があるためだと考えてもよからう。しかし、回答カテゴリの分類の仕方が悪くて予想通りの結果が得られなかったということも考えられるので、この点を確かしてみよう。

われわれは回答カテゴリを一定の基準により分類している（第3章参照）が、この分類は各回答カテゴリを1つ1つ（この回答カテゴリは伝統的、この回答カテゴリは非伝統的というように）きめたものであるから、同じ分類に分類された回答カテゴリ同志の間でも、相互に関連があるかどうかは確かでない。

しかし、われわれの回答カテゴリの分類が伝統的意見のカテゴリおよび非伝統的意見のカテゴリとして（正しく）適切に分類されていると仮定すれば、たとえばA質問項目の（伝統的な回答カテゴリとして分類された）回答カテゴリに回答した人は、伝統的な意見の持主である可能性が強いので、別のB質問項目においても“伝統的”など分類されている回答カテゴリに回答する可能性が（非伝統的と分類されている回答カテゴリに回答する可能性より）強いと考えられる。

したがって、回答者がA、B両質問項目に対してどのように回答したかをしらべ、クロス表を作成して（第19表）、この表から

第19表 A、B両質問のクロス表

| | | B | | | 計 |
|---|----------|----------|----------|----------|-------|
| | | 1 (伝統) | 2 (非伝統) | 3 (その他) | |
| A | 1 (伝統的) | r_{11} | r_{12} | r_{13} | p_1 |
| | 2 (非伝統的) | r_{21} | r_{22} | r_{23} | p_2 |
| | 3 (その他) | r_{31} | r_{32} | r_{33} | p_3 |
| | | q_1 | q_2 | q_3 | 1 |

ただし

$$\begin{aligned} \sum_j r_{ij} &= p_i \\ \sum_i r_{ij} &= q_j \\ \sum_{ij} r_{ij} &= 1 \end{aligned}$$

両質問項目の関連度として

$$\eta_{(1,2,3)} = \frac{\sum_i r_{ii} - \sum_i p_i q_i}{1 - \sum_i p_i q_i}$$

を計算すれば、((第 19 表) のクロス表で第 1 列と第 2 列を入れかえたクロス表から計算される $\eta_{(2,1,3)}$ の値より) その値は大きくなると考えられる。回答カテゴリの分類の仕方が悪ければ A 質問項目の伝統的意見のカテゴリに B 質問項目の非伝統的意見のカテゴリに当るものを組合せた (上述の η_{213} の) 方が η の値が大きくなる可能性が強いだろう)

このように、A 質問項目の回答カテゴリと組合せる B 質問項目の回答カテゴリの組合せをかえて、A、B 両質問項目の関連度を求めたとき、A 質問項目の伝統的意見のカテゴリには、B 質問項目の伝統的意見のカテゴリを、非伝統的意見のカテゴリには非伝統的意見のカテゴリ (つまり、伝統的同志、非伝統的同志を組合せる) を組合せる場合に、 η の値が一番大きくなるかどうかをしらべた。

とり上げた質問項目相互の間でこのような分析をして、 η の値が一番大きくなるのは両質問項目の伝統的意見のカテゴリ同志、非伝統的意見のカテゴリ同志を組合せたときであることが確められれば、われわれの用いた回答カテゴリの分類がよかったといえるだろう (分類の内部で一貫性をもっているといえるだろう)

このような分析を、つぎの二項選択の質問項目についておこなった。第 20 表に示したそれ

第 20 表 関連度分析にとり上げた質問項目および回答カテゴリの分類

| # | 質問項目 | 伝統的 | 非伝統的 | その他のカテゴリ |
|---------|-------------|-------------|-----------|----------------|
| 4.4 | 先生が悪いことをした | そんなことはないという | 本当だという | 場合による, その他, 無答 |
| 5.1 | 悪人がキトクするとき | 故郷へ帰る | 会議に出る | その他, 無答 |
| 5.1 b | 親がキトクするとき | 故郷へ帰る | 会議に出る | その他, 無答 |
| (5.1c-1 | 入社試験 (シンセキ) | シンセキの子 | 一番の人 | その他, 無答 |
| 5.1c-2 | 入社試験 (悪人の子) | 悪人の子 | 一番の人 | その他, 無答 |
| 5.6 | めんどろをみる課長 | めんどろみる課長 | めんどろみない課長 | その他, 無答 |

第 21 表 質問相互の関係と η の値
(上段は日本, 下段はハワイ日系人調査の結果)

| | # 5.1 | # 5.1 b | # 5.1c-1 | # 5.1c-2 | # 5.6 |
|----------|------------------------|------------------------|------------------------|------------------------|------------------------|
| # 4.4 | [X] 0.039 [X] 0.040 | [X] 0.045 v 0.090 | [X] 0.059 [X] 0.036 | [X] 0.086 v 0.031 | [X] 0.021 v 0.020 |
| # 5.1 | | [X] 0.506 [X] 0.616 | v 0.036 v 0.060 | [X] 0.068 v 0.052 | [X] 0.040 [X] 0.028 |
| # 5.1 b | | | [X] 0.034 [X] 0.032 | [X] 0.056 v 0.104 | [X] 0.032 v 0.045 |
| # 5.1c-1 | | | | [X] 0.396 [X] 0.478 | v 0.063 [X] 0.096 |
| # 5.1c-2 | | | | | [X] 0.050 [X] 0.178 |

それぞれの質問項目相互の間で“伝統的カテゴリ”同志、および“非伝統的カテゴリ”同志を組合わせたときに η の値が一番大きくなる場合、その質問項目相互の関係を [X] で示す（たとえば #4.4 と #5.1の間では“そんなことはない”という回答と“故郷へ帰る”という伝統的的回答同志を組み合わせて回答する人、および #4.4 で“本当だという”回答と #5.1 で“会議に出る”という非伝統的的回答を組合わせて回答する人の割合が他の回答をする人より相対的に多いので #4.4 と #5.1 の間の関係を記号 [X] で示す）

また、 η の値が一番大きくなる回答カテゴリの組合せが伝統的カテゴリ同志、非伝統的カテゴリ同志の組合せ以外るとき、それらの質問相互の関係を [v] で示す（第21表）。

第21表をみると、日本の場合はほぼ伝統的対非伝統的な分類はよかった（伝統的カテゴリ同志、非伝統的カテゴリ同志を選択して回答する傾向が強い）といえるが、ハワイの結果はそうならない場合がやや多くみられる。

これと同様の分析を、“賛成”、“反対”、“どちらともいえない（中間）”という3つの回答カテゴリを含むつぎの各質問項目についておこなった（第22表）。日本の場合は、どの質問項目相互の間でも、伝統的カテゴリに分類されたカテゴリは伝統的カテゴリ同志が組み合わさるとき一番 η の値は大きくなるが、“非伝統的カテゴリ”と“中間”のカテゴリの場合には必ずしも同種類の分類に入ったもの同志を組合わせたとき η の値が一番大きくなるとは限らない。すなわち、“非伝統的カテゴリ”と“中間的カテゴリ”を入れかえて“非”と“中間”を組合わせた方が η の値が大きくなる場合があり、とくに #2.5 および #7.4 と他の質問項目との間では“非伝統的カテゴリ”と“中間的カテゴリ”を入れかえた方がよい。

第22表 伝統、非伝統、中間の3項選択肢をもつ質問項目と回答カテゴリの分類

| # | 質問項目 | 伝統的 | 非伝統的 | 中間 | その他 無答など |
|------|---------------|----------|-----------|-------------------|-------------|
| 2.1 | しきりに従うか | 従え | おし通せ | 場合による | 他・無答 |
| 2.5 | 自然と人間との関係 | 自然に従え | 自然を征服 | 自然を利用 | 他・無答 |
| 4.5 | 子供に「金は大切」と教える | 賛成 | 反対 | その他 | 他・無答 |
| 4.10 | 養子につがせるか | つがせる | つがせない | 場合による | 他・無答 |
| 7.4 | 国と個人の幸福 | 国→個人 | 個人→国 | 国=個人 | 他・無答 |
| 8.1 | 政治家にまかせるか | 賛成（まかせる） | 反対（まかせない） | 時・人による そんな人出ない | 他・無答 |

第23表 質問相互の関係と η の値
上段は日本、下段はハワイ日系人調査の結果

| | # 2.5 | # 4.5 | # 4.10 | # 7.4 | # 8.1 |
|--------|----------------------|-------------------------------|------------------------|------------------------|------------------------|
| # 2.1 | [X] 0.072 v 0.029 | [X] 0.085 {○} {●} 0.025 | [X] 0.068 (○) 0.041 | [X] 0.035 v 0.036 | [X] 0.097 (○) 0.051 |
| # 2.5 | | [Y] 0.066 v 0.049 | [X] 0.031 v 0.066 | [Y] 0.081 v 0.046 | [Y] 0.081 (●) 0.103 |
| # 4.5 | | | [X] 0.148 v 0.033 | [X] 0.060 (●) 0.020 | [X] 0.129 [X] 0.079 |
| # 4.10 | | | | [Y] 0.041 v 0.048 | [X] 0.101 v 0.056 |
| # 7.4 | | | | | [Y] 0.021 (○) 0.054 |

(●) は伝統的カテゴリだけ一致したことを示す
(○) は非伝統的カテゴリだけ一致したことを示す
v はその他の組合せの場合

前と同様に（“伝統的カテゴリ”には“伝統的カテゴリ”が“非伝統的カテゴリ”には“非伝統的カテゴリ”が“中間カテゴリ”には“中間カテゴリ”というように）同じ分類に入る回答カテゴリ同志を組合わせた時、 η の値が一番大きくなる質問相互の関係を記号[X]で示し上にのべた“非伝統的カテゴリ”と“中間カテゴリ”を組合わせた時（このとき“伝統的カテゴリ”は“伝統的カテゴリ”と組合せる） η の値が一番大きくなる場合の質問相互の関係を記号[Y]で示すことにすると第23表のようになる。

日本の場合は#2.5と他の質問の間、および#7.4と他の質問項目の間には[Y]の場合もあるが全体的にみると前と同様に（同じ分類に入ったもの同志を組合わけて選択する）[X]の関係が支配的である。（すなわち、伝統的カテゴリ同志、非伝統的カテゴリ同志、中間的カテゴリ同志を選択して回答する可能性が高いといえる）

一方、ハワイの場合は#4.5と#8.1の間の関係だけが[X]で他はすべて同じ分類に入る回答カテゴリ同志を組合わせたときより、他の回答カテゴリを組合わせたときの方が η の値は大きくなる。わずかに、われわれの分類で“伝統的カテゴリ”と分類したもの同志が組合わさるのは#2.1と#4.5、#2.5と#8.1および#4.5と#7.4の間であり、“非伝統的カテゴリ”と分類したものが組合わさるのは#2.1と#4.5、#2.1と#4.10、#2.1と#8.1、#7.4と#8.1の間だけである。

このように、日本の結果は、回答カテゴリの分類がほぼ内的一貫性をもっているのに対して、ハワイの結果はこうならない。

すはわち、日本人を相手とした場合にはその人がある質問項目である回答をしたとき、その回答はどの分類に入るかを考えて、他の質問に対する回答をある程度予想することができる。回答カテゴリの分類がある程度一貫した構造をもっているので期待はずれになることは少いといえる（“ものの考え方”のスジ道を予期できるともいえる）。しかし、ハワイ日系人を相手にした場合、われわれの持っている考え方のスジ道をそのまま利用していくと予期できない場合が多く出てくるので、1つの質問に対する回答結果から、他の質問の回答を予想するとき、予想以外の回答に出合う機会が多くなるものと期待される。たとえば、われわれが日系人と話しているとき、“日本人と同じ”と考えて話をしていれば印象としては、会話の途中で“期待の gap”が大きいということになる可能性が高いともいえるだろう。

以上のことから分るように、われわれが用いた回答カテゴリの分類は、日本の調査結果の場合にはほぼ全面的に分類の内容が同じようになっていると考えて利用できる。しかし、ハワイの場合はそうではない。したがって、ハワイの調査結果には、質問項目の分類をわれわれの考えている伝統的↔非伝統的という面から見では理解できない別の要因が影響をあたえているという可能性が強い。とくに、伝統的↔非伝統的な回答カテゴリばかりでなく、中間的なカテゴリを含む質問項目のグループでは日本との差が大きくなっている。どのような観点からみればハワイの調査結果を支配している“ものの考え方”の原理が理解できるのか？これはIIに示されよう。

付 録

基本項目別分析一覧表

| 基本項目 | 有意差検定の対象 | 表の記号の説明 |
|---|--|--|
| 日 ハ 本 ワ お イ 日 よ 系 び 人 | 性：男と女の各サブサンプルの間の比率 年齢：20歳台と50～60歳以上の間の比率 (日本は20～24歳の層と60歳以上) 学歴：小・中学卒の層と大学卒の層の比率 (日本は小学卒の層と大学卒の層) | 表では(+)は男の%>女の%, (-)は逆 表では(+)は20代の%>50～60以上の%, (-)は逆 (○は30↔50で差のあるもの) 表では(+)は小・中層の%>大学卒の%, (-)は逆 (○は小・中↔高あるいは高↔大で差のあるもの) |
| ハ ワ イ 日 系 人 | 世 代：三世と二世の間 宗 教：仏教信者とキリスト教信者の間 日本語：日本語よく出来る層とよく出来ない層の間 綜 合：基本項目総合パターン分類により4段階に分け(-0.8以下, -0.8～0, 0～0.8, 0.8以上) 非日本的グループと日本的グループとの間(第5章参照) 名 前：日常の呼び名が日本式の層とアメリカ式の層との間 | 表では(+)は二世の%>三世の%, (-)は逆 表では(+)は仏教信者の%>キリスト教信者の%, (-)は逆 (○はキリスト教信者と宗教なしの間) 表では(+)はよくできる層の%>よくできない層の% 表では(+)は非日本的グループの%>日本的グループの%, (-)は逆 表では(+)は日本名前の層の%>アメリカ名前の層の% |

表の分類欄は第3章にのべた回答カテゴリーの分類である。

●印は伝統的な意見のカテゴリ ……はこのような分類に関係のないカテゴリを示す。

○印は非伝統的な意見のカテゴリ △印はこのどちらにも入らないカテゴリ

また、有意差検定の結果、有意差のないものは √ で示す。

基本項目別分析一覧表 (つづき)

| § | # | 質問の見出し | 回答カテゴリ | 基本項目 | | | | | | | | | | | | | |
|-------------------|------------|-----------------------|-------------|-----------|-----------|--------|------------------|-----------------------|--------|------------|--------|--------|--------|-------------|--------|---|---|
| | | | | 分 類 | 日本 (1968) | | | | | ハワイ (1971) | | | | | | | |
| | | | | | 年 齢 | 学 歴 | 日 本 % % | ハ ワ イ % % | 年 齢 | 学 歴 | 世 代 | 宗 教 | 名 前 | 日 本 語 | 綜 合 | | |
| §5 身近な社会 | 5.7 | 近所・安い・有名な店 一万円の借用書 | 2 安い店 | .. | ∨ | ∨ | ∨ | 13 | 2 | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ |
| | 5.16 | | 3 有名な店 | .. | ∨ | ∨ | - | 35 | 32 | ∨ | - | ∨ | + | ∨ | + | ∨ | + |
| | | | 1 不愉快 | ○ | ∨ | + | ∨ | 17 | 88 | ∨ | + | - | - | - | ∨ | - | + |
| | | | 2 当然 | ● | ∨ | ∨ | ∨ | 82 | 59 | ∨ | - | + | + | + | ∨ | + | - |
| §6 男女差別 | 6.2 | 男・女の生まれかわり | 1 男に | .. | ∨ | ∨ | 65 | 55 | - | ∨ | ∨ | ○ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ |
| | | | 2 女に | .. | + | + | 28 | 36 | + | ∨ | ∨ | ○ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | + |
| | 6.2 c | 苦勞どちが多いか | 1 男に多い | .. | + | ∨ | - | 53 | 26 | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ |
| | | | 2 女に多い | .. | - | ∨ | + | 27 | 45 | ∨ | ∨ | + | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ |
| 6.2 d | 楽しみどちが多いか | 1 男に多い | .. | + | + | - | 63 | 59 | + | + | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | |
| | | 2 女に多い | .. | - | ∨ | ∨ | 13 | 9 | - | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | |
| §7 一般の社会的問題 | 7.1 | 人間らしさはへるか | 1 賛成 (へる) | △ | ∨ | ∨ | ∨ | 40 | 63 | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ |
| | | | 3 反対 (へらない) | ○ | ∨ | ∨ | ∨ | 35 | 29 | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ |
| | 7.2 | | 心の豊かさはへらないか | 1 反対 (へる) | △ | + | ∨ | ∨ | 22 | 22 | ∨ | ∨ | ∨ | ○ | ∨ | ∨ | ∨ |
| | 7.2 b | 21世紀の世の中 | 3 賛成 (へらない) | △ | ∨ | + | - | 56 | 63 | + | + | - | ∨ | - | ∨ | + | ∨ |
| | | | 1 不愉快なことふえる | .. | ∨ | ∨ | + | 24 | 39 | ∨ | ∨ | + | + | + | ∨ | + | ∨ |
| | | | 2 不愉快なことへる | .. | ∨ | ∨ | ∨ | 15 | 13 | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ |
| | 7.4 | 国と個人の幸福 | 3 変わらない | .. | ∨ | + | - | 53 | 36 | ∨ | + | - | - | - | ∨ | - | + |
| | | | 1 個人→国 | ○ | + | + | - | 27 | 32 | ∨ | + | - | - | ● | - | ∨ | + |
| | | | 2 国→個人 | ● | ∨ | - | + | 32 | 26 | ∨ | - | + | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | - |
| | 7.5 b | 公益と個人の権利 | 3 国=個人 | ○ | ∨ | ∨ | ∨ | 36 | 36 | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ |
| | 1 個人を重視せよ | | .. | ∨ | + | ∨ | 33 | 21 | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | |
| 7.6 | 勲章か、賞金か | 2 公益を重視せよ | .. | + | - | - | 57 | 70 | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | |
| | | 1 勲章 | ○ | ∨ | + | ∨ | 59 | 64 | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | |
| 7.7 | 仕事の価値 | 2 賞金 | △ | ∨ | ∨ | - | 25 | 20 | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | |
| | | 1 実際の仕事 | △ | ∨ | + | + | 31 | 33 | ∨ | ∨ | + | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | |
| 7.13 c | 法律の精神 | 2 学者や芸術家 | △ | ∨ | ∨ | ∨ | 17 | 14 | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | |
| | | 3 同じ | △ | + | ∨ | - | 23 | 38 | ∨ | ∨ | - | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | |
| | | 1 ぐあいよく生活できるように | .. | ∨ | ∨ | ∨ | 37 | 27 | ∨ | ∨ | - | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | |
| | | 2 正義がおこなわれるように | .. | ∨ | + | - | 56 | 68 | ∨ | ∨ | + | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | |
| §8 政治・権威に対する態度 | 8.1 | 政治家にまかせるか | 1 賛成 (まかせる) | ● | - | - | + | 30 | 13 | ∨ | - | + | + | ∨ | ∨ | ∨ | - |
| | | | 3 反対 | ○ | + | + | - | 51 | 70 | ∨ | + | - | - | ∨ | ∨ | ∨ | + |
| | 8.2 e | 「民主主義」はよいか | 1 よい | .. | + | + | - | 38 | 74 | ∨ | + | - | - | ∨ | - | - | + |
| | | | 2 時と場合 | .. | - | ∨ | ∨ | 52 | 21 | ∨ | - | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | - |
| | | | 3 よくない | .. | + | ∨ | ∨ | 20 | 18 | ∨ | ∨ | + | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ |
| | 8.2 f | 「資本主義」はよいか | 1 よい | .. | + | ∨ | - | 19 | 29 | ∨ | + | - | - | ∨ | - | - | + |
| | | | 2 時と場合 | .. | ∨ | + | - | 42 | 41 | - | + | - | - | ∨ | ∨ | ∨ | + |
| | | | 3 よくない | .. | + | ∨ | ∨ | 29 | 20 | ∨ | ∨ | ∨ | - | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ |
| 8.2 g | 「自由主義」はよいか | 1 よい | .. | + | ∨ | - | 29 | 20 | ∨ | ∨ | - | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | |
| | | 2 時と場合 | .. | ∨ | + | - | 44 | 47 | ∨ | + | ∨ | - | ∨ | - | - | + | |
| | | 3 よくない | .. | ∨ | ∨ | ∨ | 13 | 13 | ∨ | - | - | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | |
| 8.2 h | 「社会主義」はよいか | 1 よい | .. | ∨ | ∨ | ∨ | 16 | 11 | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | |
| | | 2 時と場合 | .. | ∨ | + | - | 46 | 42 | ∨ | + | - | - | ∨ | - | - | + | |
| | | 3 よくない | .. | + | - | ∨ | 20 | 30 | + | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | |
| 8.3 b | 専門の研究と政治 | 1 専門の研究に専心 | ● | + | - | ∨ | 18 | 24 | ∨ | - | + | ∨ | ∨ | ∨ | + | - | |
| | | 2 政治にも関心を | ○ | ∨ | + | - | 55 | 51 | ∨ | + | - | ∨ | ∨ | ∨ | - | ∨ | |
| | | 3 積極的に参加 | △ | ∨ | ∨ | ∨ | 20 | 21 | ∨ | ∨ | - | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | |
| §9 人日人本種 | 9.3 | 日本の庭・西洋の庭 | 1 日本の庭 | ● | ∨ | ∨ | ∨ | 91 | 71 | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ |
| | 2 外国の庭 | | ○ | ∨ | + | - | 7 | 9 | - | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | ∨ | |

参 考 文 献

- [1] Alker, Hayward R., Jr.: "Statistics and Politics: The Need for Causal Data Analysis." in S.M. Lipset (Ed.). *Politics and Social Science*, New York, Oxford University Press, 1969. pp 244-313
- [2] Almond, G. and Sidney Verba: *The Civic Culture: Political Attitudes and Democracy in Five Nations*, Princeton, Princeton University Press, 1963, pp 56-72.
- [3] Black, Max: *Models and Metaphors; Studies in Language and Philosophy*, Cornell University Press, 1962.
- [4] Cannell, C.F., and R.L. Kahn: "Interviewing" in G. Lindzey and E. Aronson (Eds.), *Handbook of Social Psychology*, Vol II, Reading, Mass., Addison-Wesley, 1968. pp 526-595.
- [5] Inkeles, Alex: "Personality and Social Structure", in R.K. Merton et al. (Eds.), *Sociology Today*. New York; Basic Books, 1959. pp. 249-276.
- [6] Inkeles, Alex: Some Sociological observations on culture and personality studies. In C. Kluckhohn, H.A. Murray, and D.M. Schneider (Eds.), *Personality in Nature, Society, and Culture*. (2nd ed), New York: Knopf, 1953. pp 577-592.
- [7] Inkeles, Alex: Sociology and Psychology, in S. Koch (Ed.), *Psychology: A Study of a Science*, Vol. 6 New York: McGraw-Hill, 1963. pp 317-387.
- [8] Inkeles, Alex, and Daniel J. Levinson: National Character; the Study of Modal Personality and Social Systems, in G. Lindzey (Ed.), *Handbook of Social Psychology*. Cambridge, Mass. Addison - Wesley, 1954. pp 975-1020
- [9] Inkeles, Alex, and Daniel J. Levinson: National Character: the Study of Modal Personality and Sociocultural Systems. In G. Lindzey and E. Aronson (Eds.), *Handbook of Social Psychology*. Vol. II, Reading, Mass.: Addison-Wesley. 1968. pp 418-506.
- [10] Lansing, John B., and James N. Morgan: *Economic Survey Methods*. Institute for Social Research, The University of Michigan, Ann Arbor, Michigan, 1971.
- [11] Parsons, Talcott: *Social Structure and Personality*, New York; Free Press. 1964.
- [12] 鈴木達三 : ハワイにおける日系人, 学術月報, 24, 1972 Feb., pp 37-44.
- [13] Suzuki T.: A Study of the Japanese National Character, The Third Survey. *Ann. Inst. Statist. Math.*, Sup. IV, 1966, pp 15-64.
- [14] ———: A Study of the Japanese National Character—part IV, *Ann. Inst. Statist. Math.*, Sup. 6. 1970, pp 1-80.
- [15] ——— (et al.): A Study of Japanese-Americans in Honolulu, Hawaii. *Ann. Inst. Statist. Math.*, Sup. 7, 1972, pp 1-60.
- [16] よみ書き能力調査委員会 : 日本人のよみ書き能力, 東大出版, 1951.
- [17] 統計数理研究所国民性調査委員会 : 日本人の国民性, 至誠堂, 1961.
- [18] 統計数理研究所国民性調査委員会 : 第2日本人の国民性, 至誠堂, 1970.
- [19] ——— : ハワイにおける日系人, 数研研究リポート No. 33, 1973.
- [20] 林知己夫編 : 比較日本人論, 中央公論社, 1973.